



何を学ぶのか、いかに学ぶのか

2026(令和8)年度

社会学部履修ガイド

一橋大学社会学部

Contents

目 次

社会学部で学ぶ皆さんへ	1
社会学部のカリキュラムについて	4
社会学研究分野	21
社会学の考え方	22
学び方	22
履修モデル（社会学・国際社会学・ジェンダー研究）	23
社会調査士資格について	26
最近の卒業論文	26
参考文献	28
共生社会研究分野	31
教育社会学	32
文化精神医学・医療人類学・トラウマ研究	33
スポーツ社会学	34
社会政策	35
開講科目	36
歴史社会文化研究分野	39
歴史学への招待	40
哲学・社会思想史への招待	47
文芸・言語研究への招待	50
超域社会研究分野	53
社会心理学	53
社会人類学	55
政治学	57
環境と社会	59
■大学院への招待	63



社会学部で学ぶ皆さんへ

社会学部長 中 田 康 彦

新入生の皆さん、一橋大学社会学部へようこそ。

この小冊子は、一橋大学社会学部の皆さんの学習の手引きとして作られています。ページをめくりながら、長いようで短い四年間の大学生活についてそれぞれに見通しを持っていただきたいと思います。

「市民社会の学である社会科学の総合大学」という一橋大学の特徴が一番強く表れているのが社会学部だ——私はそう感じています。社会学部は、皆さん一人ひとりが、幅広い教養を身につけ、またリサーチ・アンド・クエスチョンを重ねながら、時代に柔軟に対応し積極的に働きかけていくための自分自身の「知」の器を作りあげていく場所です。このため、1・2年次には基盤となる教養や知識、技法、視点を幅広く多面的に学びます。それらを踏まえて3・4年次では、ゼミに所属して専門的な学問を深めていきます。また、皆さんはそれぞれに自らの学習・研究活動の成果を卒業論文としてまとめていく過程で、各教員を通じて、躍動する知の最先端に触れていくことと思いますが、これも社会学部で学ぶ大きな魅力のひとつと言えるでしょう。

カリキュラムの特徴とねらい

社会学部の学生定員は2百人を超えますが、学科は社会学科の一つです。この冊子の目次が示すように、全体が大きく4つの研究分野に区切られる一方、社会学部のカリキュラムには、社会学・社会調査、国際社会学、哲学・思想、言語文化、社会心理学、社会人類学、社会地理学、教育社会学、スポーツ社会学、政治学、社会政策、歴史、ジェンダー研究といった多彩な学問分野の授業が含まれています。他大学であれば複数の学部にもたがるような多様な分野をひとつの学部で学ぶことができるのは、社会学部の大きな利点です。

社会学部生は、それら研究分野・領域のどれかに限定された形で所属することはありません。3年生からはゼミに所属することになりますが、ゼミの指導教員の研究分野・領域にもとらわれずに、いわば皆さん一人ひとりのカリキュラムを組み上げていくことになります。皆さんは数多く開講されている社会学部の科目、全学共通教育や他学部の科目から、自由に選択して自分独自の時間割を作ります。

ただし、多様性を享受し、総合性を発揮することはたやすくはありません。自己設計力が問われます。皆さんにはさまざまな探求の方法を学び、自分だったらどういう視点で社会を捉えていくか、自律的思考力を磨いていただきたいと思います。自由度の大きさに戸惑う人たちもいるでしょう。しかし、私たち社会学部の教員は、本学部に入學してきた学生の皆さんがいろいろと迷いながらも自ら学ぶ意欲や力を十分に発揮し大きく成長していくことを、経験的に知っています。

もちろん、そうした方向性が実際に決まる時期は人によりかなりの差があります。早く決まれば、それはそれでよいでしょう。しかし、早く決まらなければならないというわけではありません。自分と社会をじっくり見つめ直しながら、いかにして自己実現していくか、4年間をかけてじっくり考えてほしいと思います。こうした時間を持つことこそ、学部時代——とりわけその最初の時期——の重要な意義であると考えます。

学年進行から見た社会学部の学び

社会学部が皆さんの学びに用意していることを、学年進行に即して示してみましよう。

1年次に用意されているのは学部導入科目です。学部導入科目は必修科目と選択科目で構成されます。学部導入科目の必修科目は、「社会研究の世界」「社会科学概論Ⅰ・Ⅱ」そして「導入ゼミナールⅠ・Ⅱ」の5科目です。「社会研究の世界」では、社会学部を構成する様々な学問分野について、各担当の教員が順次登場して紹介します。「社会科学概論Ⅰ・Ⅱ」は社会科学の考え方、問題意識や方法論の基礎を学ぶ科目で、春学期には高校から大学への転換教育を重視した「Ⅰ」を、秋学期には特定の具体的な学問分野に即した「Ⅱ」を、それぞれ複数開講される中から選んで学びます。「導入ゼミナールⅠ・Ⅱ」は、資料文献を探索する、学術書を読む、レポートや論文を書く、プレゼンテーションをするといった社会科学の学びに必要な技法の基礎を修得することを目標とした、1クラス15名程度の授業です。さらに、学部導入科目の選択科目には、「社会学概論」「哲学概論」「政治と社会」等々といった、社会科学を学ぶうえで前提となる知識や方法を学ぶことを目的とした授業が用意されています。

2年次からは学部基礎科目が用意されています。社会学部の各学問分野・研究領域を本格的に学び始める皆さん一人ひとりの選択肢は、ここで一挙に広がります。皆さんはそれらを様々に選択し、学び、試行錯誤してください。たとえば、社会科学の幅広い視点を学び取るために、4つの研究分野からそれぞれ少なくとも1つの基礎科目を履修するというの是一案です。3年次に所属しようと考えているゼミがあるなら、その教員が担当する科目や関連・周辺科目を履修してみることもお勧めします。皆さん一人ひとりが、関心と意欲にかなう学びを見つけてください。また、1年次の冬に実施される選考を経て、2年次から社会学部のグローバル・リーダーズ・プログラム（GLP）に参加することもできます。社会学部のGLPは、地球社会の様々な場で活躍する企業人、国際機関職員、研究者、ジャーナリストなどの育成をめざすプログラムで、英語を含む多言語運用能力を重視している点に特徴があります。

3年次になると学部発展科目を履修できます。まずは、2年次までの学びの成果と関わらせながら履修科目を選択し、積み重ねていくのがいいでしょう。なかには発展科目から履修を開始できる学問分野もあります。新たな挑戦を爽り多いものにする、そうした選択眼を3年になるまでに養っておくことも大切です。そして、3年次の初めに皆さんは特定のゼミを選び、そこでの学習を始めます。ゼミは、指導する教員によって内容も方法も、自由度も大きく異なります。また、ゼミでは研究事例を検討したり実際に調査やデータ分析をおこなったりすることが多くなりますが、こういった学問分野・領域でもその方法と理論を具体的な経験を通じて学ぶことが重要です。

なお、社会学部では、学部・大学院5年一貫教育プログラムを整備しています。一般に、学士課程が4年間で大学院修士課程が2年間であるのに対し、5年一貫教育プログラムでは5年間で学士課程と大学院修士課程を修了できます。学部3年次の冬にエントリーを受け付け、学部4年次の夏に特別選抜試験を実施します。海外に留学する場合であっても、履修の状況によっては5年間で修士号取得も可能です。皆さん一人ひとりの社会科学研究を深めるために、5年一貫教育プログラムも積極的に利用してください。

4年次は、すでに就職活動も本格化していますが、なによりゼミで指導を受けながら卒業論文を執筆する大事な年次です。卒業論文に専念することによって得るものはたくさんあります。大学院へ進学して本格的な研究を始めるという選択肢が見えてくることもあります。長い社会人生活をスタートする前の最後の年として、大切に過ごしてもらいたいと思います。

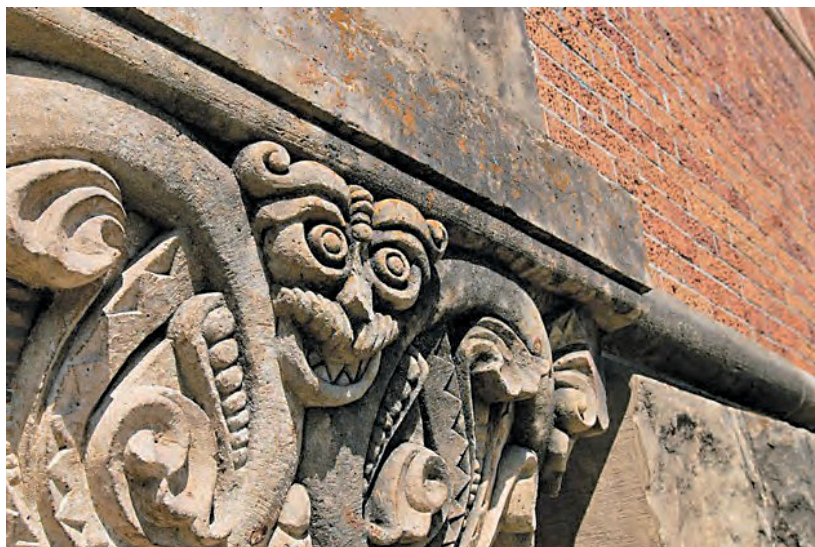
もちろん皆さんには、学部専門科目だけでなく、一橋大学の伝統である「深い教養」を提供してきた全学共通教育科目、皆さんを世界に誘う最高水準の語学教育・英語スキル科目・短期海外語学研修プログラム・HGP（英語で提供される授業科目）など、全学レベルで提供される授業や、他学部科目についても、必修・選択の如何を問わず積極的に取り組んで欲しいと思います。「学部間の垣根の低さ」もまた、一橋大学の伝統です。皆さんにはぜひ四年間で一橋大学を学び尽くして欲しいと思います。

生活の中での学び

大学での学びも、それを成り立たせている生活全体の中で考える必要があります。例えば、学費や生活費に充てるためアルバイトをするケースは少なくないでしょう。また、部活やサークル活動を熱心に行うことも、授業などでは得られない貴重な経験を与えてくれます。高校までと違って、自発的に責任をもって活動することは、仲間を作るという点でも一生の財産となるでしょう。

しかし、重要なことは、さまざまな活動に励むとしても、それは2～3に限定されるべきだろう、ということです。そして活動間のバランスを取ることが大切です。社会では「ワーク・ライフ・バランス」の重要性が指摘されるようになりました。学生生活においても、部活やダブルスクールや就活など、いくつかの活動間のバランスをうまくとってほしいと思います。

最後に強調しておきたいのは、これからの四年間を通じて何か悩みや迷い、相談ごとがあったときには、気軽に私たちにアプローチして欲しいということです。一橋大学にはさまざまな学生相談窓口があります（学生相談室、アクセシビリティ支援室、ハラスメント相談室、保健センター、留学生相談室、キャリア支援室など）。どの窓口に行くのがいいか迷ったら、とりあえずどこでも良いですから行ってください。そして一橋大学では、教員もまた、大教室の遠い壇上にいる存在ではありません。やがてゼミなどの少人数教育の場で、皆さんがそれを実感するのを信じています。



社会学部のカリキュラムについて

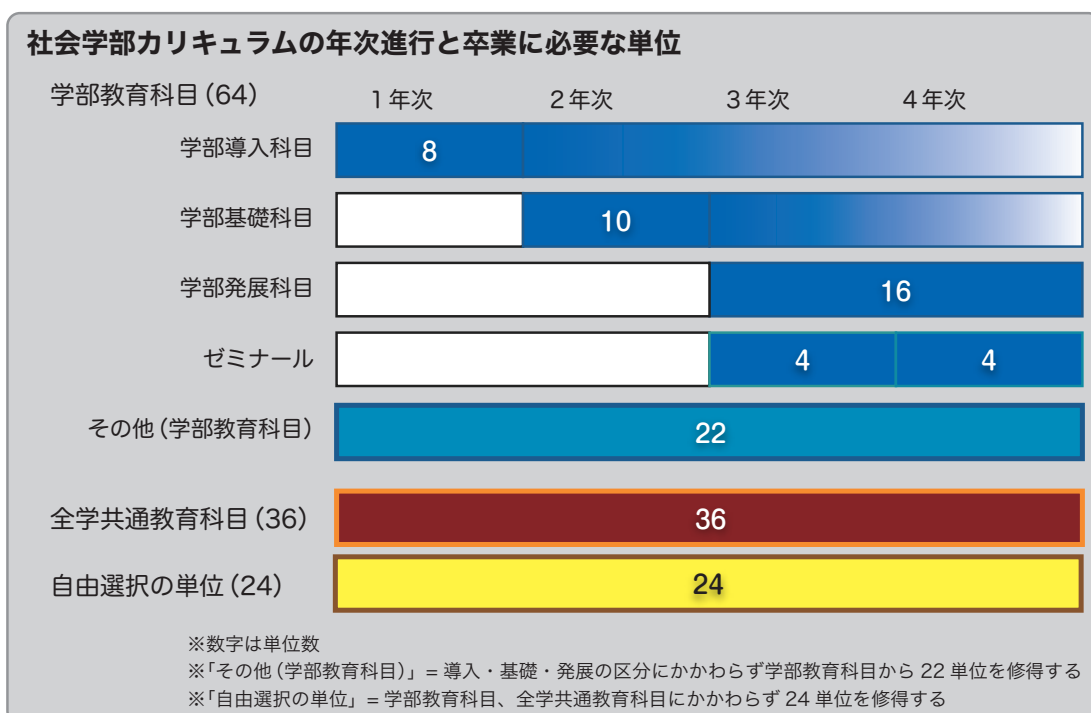
■天文学的な選択肢

社会学部のカリキュラムには、学部導入科目やゼミナールなどを除いても 100 を超える多様な科目が用意されています。しかも社会学部では、専攻やコースごとに必修科目や選択必修科目が決まっている、というようなことはありませんから、履修の選択肢は文字通り天文学的な数字になります。たとえば、カリキュラムの中核である学部基礎科目と学部発展科目の、卒業に必要な最低単位数の合計 26 単位を修得するだけでも、単純計算で 3000 兆を超える組み合わせの科目選択が可能です。実際には、年によって開講されない科目があったり、時間割の制約を受けたりしますから、このとおりにはありません。けれども、この数字はあながち誇張とも言えません。4 年の間には大部分の科目に履修機会があるでしょうし、また、卒業にはこれら 26 単位分の科目のほかに、その他の学部教育科目だけで 22 単位分の科目履修が必要だからです。選択肢は実に膨大なものになります。

こうして、社会学部の学生は、それぞれの問題意識、目的、興味関心、に応じて、ひとりひとりのいわば「マイ・カリキュラム」を組立てることができる環境にあります。ただしそれは、ややもすると散漫もしくは勤勉(!)な単位コレクターに終始して「いろいろな講義を受けたなあ…」という漠然とした感想で 4 年間が終わる、という危険性も意味します。皆さんひとりひとりに、軸のしっかりした、意欲的な学修プランが出来上がることを、強く願います。

■カリキュラムの縦糸と横糸

まずは全体を見渡してみましょう。社会学部のカリキュラムは、学習段階/年次進行に応じて配置される「学部導入科目」(1 年次)、「学部基礎科目」(2 年次以降)、「学部発展科目」(3・4 年次)と、3・4 年次に履修する「ゼミナール」からなります。学部導入科目は、5 つの必修科目(「社会研究の世界」、「社会科学概論 I・II」、「導入ゼミナール I・II」)と社会学部を構成する各専門分野から提供される選



択科目からなり、社会科学のものの見方・考え方への導入がなされます。学部基礎科目では各専門分野ごとの基礎的内容を、学部発展科目では応用的・先端的内容を学びます。そしてゼミナールでは、担当教員を中心とした少人数のクラスで、学習の定着・発展と、学生ひとりひとりの問題意識の深化・結実とを目指します。学部導入科目は新生が社会学部で学習する姿勢作りをする機会、ゼミナールは後期課程の学生が学習の深化・高度化と集大成をはかる場です。これらは学生のそれぞれの段階の学習ベースになります。これらのベースに材料や題材を提供するのが、学部基礎科目と学部発展科目です。これらは個々の専門分野ごとに、基礎から応用・先端的領域まで、さまざまな視点・思考法・事実認識・問題提起・争点を学び、考察する機会を提供します。そして、社会学部のカリキュラムの多様性とは、学部基礎科目と学部発展科目の多様性であり、これらがカリキュラムの中核を占めています。

カリキュラムを構成するこのように多様な科目群を、縦糸と横糸という観点から見なおしてみましょう。縦糸とは各科目の学問分野・研究分野、横糸とは各科目が扱うテーマ／トピックです。

縦糸から見ていきましょう。カリキュラムを構成する科目群は多岐にわたりますが、社会学部はこれらを、背景とする学問分野や方法論の共通性・類縁性をもとに4つのグループに分類しています。社会学研究分野、共生社会研究分野、歴史社会文化研究分野、超域社会研究分野の4つの研究分野です。それぞれ以下のように性格づけられています。

- (1) 社会の構造とその動態を総合的に明らかにし、社会科学のなかでも特に社会学（ソシオロジー）を中心としながらも多岐にわたるテーマを対象としており、多くの関心に対応できる「社会学研究分野」
- (2) 他者との共生という視点を踏まえつつ、人々の日常生活における活動（学ぶ、健康を保つ、世話をする、働く、人とつながる、余暇を過ごすなど）を通じた、ウェルビーイング（幸福）の達成について研究する「共生社会研究分野」
- (3) 歴史学、社会思想史、哲学・倫理学、文芸思想研究、言語社会学などの人文科学を探究し、基本的な研究姿勢としては歴史的史料や原典を徹底的に読み込み分析することを重視する「歴史社会文化研究分野」
- (4) 社会心理学、社会／文化人類学、政治学、社会地理学、環境と社会から構成され、環境・社会・政治・人間行動を人文・社会・自然科学横断的に探究していく「超域社会研究分野」

これらは、個々に必修科目をもつ専攻やコースのようなものではありません。科目間の関係・まとまりを示す、履修計画を立てるためのガイドラインと考えてください。たとえば、もしもあなたが人類学に興味をもつなら、超域社会研究分野に分類されている関連科目を確認してみましょう。学部基礎科目に「社会人類学総論」そして学部発展科目に「周辺状況の諸問題」「エスノグラフィ」の各科目があります。複数の担当教員がそれぞれの研究フィールドと切り口を背景に交代で担当するこうした授業はあなたの興味に応えてくれるでしょう。もっとも、これらは1年次のうちは履修できないわけですが、学部導入科目にも「人類学概論」が置かれています。これを手掛かりに人類学の学習を始めましょう。また、学部教育科目にはこれらのほかにも、歴史社会文化研究分野の「社会と文化」、社会学研究分野の「国際社会学」など、人類学を学ぶうえで参考になる関連科目があります。これらの科目を軸にして学修プランをたて、さらに3・4年次に社会人類学担当の教員のゼミナールを履修することで、あなたはあたかも社会人類学専攻コースの学生のように4年間を過ごすことができるでしょう。

以上、人類学を例にあげましたが、もちろん他の学問分野でも同じことが言えます。このように特定の学問分野を軸にして作成された学修プランが、縦糸重視の「マイ・カリキュラム」です。これは、専

門に特化して勉強したい学生に向いているでしょう。しかし、社会学部での学び方はこれだけではありません。各科目のテーマ／トピック、つまり、カリキュラムの横糸を重視して学修プランを立てることもできます。そしてそれが一橋大学社会学部の特徴でもあるのです。基本的には縦糸に沿ってこうと考えている学生も、常にこの横糸を意識するようにしてほしいものです。ここでは、いくつかの例をあげながら説明してみます。

■履修キーワードという横糸

前で説明した4つの科目群は、学問分野や方法論の共通性・類縁性をもとにした分類でした。しかし、社会でおきる現象や問題のひとつひとつが、それぞれにこの4研究分野のもっぱらどれか1つだけで研究されるということはありません。たとえば、「なぜ戦争はなくなるのだろうか」、「戦争を食い止めるためにはどうすればよいのだろうか」などと考えようとするとき、それなら「社会学研究分野」の専門だ、とか、それなら「歴史社会文化研究分野」は関係がない、とかいうことはできません。むしろ、4つのグループのさまざまな科目が、それぞれの仕方で「戦争」とは何かを——もちろん科目によって関わりかたに濃淡はあるでしょうが——考え、関連する研究を行っているのです。

しかし、そのことがわかっているにもかかわらず、実際にどの研究分野のどの科目を選んだらよいかは、授業シラバスをざっと見比べてくらいではよくわかりません。そこで社会学部では、研究の中心的なキーワードを12個選び、ひとつひとつ関連する講義科目を各年度で整理して対照表を作成しています。14ページの表の左端に並んでいる語群、すなわち、「文化」「言語・コミュニケーション」「エスニシティ」「ジェンダー・セクシュアリティ」「国家・市民社会・公共性」「情報・メディア」「人権」「福祉・ケア」「グローバルイゼーション」「環境」「経済・開発」「平和・紛争・暴力」がそれらです。

■横糸に沿ってプランを立てる

これら履修キーワードを使って、社会学部のカリキュラムを横糸に沿って眺めてみましょう。たとえば、あなたが日頃から「コミュニケーションがうまくとれない」とか「言葉が上滑りしている感じがする」とか感じていて、そうした経験に関連した勉強をしたいとしましょう。この場合、そのままずばり「言語・コミュニケーション」というキーワードがあります。そこから各科目群を横断する横糸を辿ってみると、学部基礎科目の表からは「国際社会学」、「社会と文化」、「社会心理学」、また、学部発展科目の表からは「社会文化論原典講読」などの科目が、あなたの選択の候補として浮かびあがります。また、ある科目に「言語・コミュニケーション」というキーワードが付けられていないからといって、その科目が無関係だなどとすぐには判断しないでください。たとえば、教育学関係の科目は、自明の前提として、言語とコミュニケーションに関する考察を含んでいます（教育の営み自体がコミュニケーションですので）。ですから履修科目の候補には、「教育の歴史」「教育の社会学」「比較・国際教育学」なども加えられてよいでしょう。キーワード一覧を目安として使いながら、シラバスを隅々まで熟読していけば、ほかにも関連科目が見つかるだろうと思います。ここでは「言語・コミュニケーション」を例にとりましたが、先に例示した「戦争」でも、あるいは「エスニシティ」でも「ジェンダー」でも同じことです。みなさんそれぞれに、横糸を辿る工夫を試みてください。

■キーワードにあてはまらないとき

もちろん、あなたの問題意識や興味関心が、12のキーワードにあてはまらないこともあるでしょう。しかし、そうした場合もこの対照表は、あなた自身の問題意識や興味関心を整理し具体化して学修プランを立てることに役立ちます。最後にこれを例示してみましょう。たとえば、「ニート」（雇用されてお

らず、教育を受けているわけでもなく、職業訓練を受けてもいない若者) 問題が気になっているとします。キーワードに「ニート」はありません。

しかし、「ニート」を考えようとするれば、労働市場や雇用が問題の背景にありそうなことはすぐにわかりますね。あるいはそれを若者の自立ということにつなげて理解することもできそうですから、家族社会学や、セクシュアリティ、またメンタル・ヘルスなどに視野を広げることできます。また、若者問題というのは、逆に言うと老人問題——ひいては人口問題——とも関連するので、福祉やケアも無視できないでしょう。さらには、昔から日本人は家から自立するのが下手だったのでは…といった観点から見ると、日本の近世史から学ぶことができるかもしれません。こういうわけで、「ニート」がどういう問題の複合なのかを考えながらキーワード対照表やシラバスを読んでいくと、さまざまな縦糸や横糸が見えてくるはずです。縦糸からみると、さしあたり共生社会研究分野の科目群が関係深いだろうと予想されます。また横糸からみれば、「ジェンダー・セクシュアリティ」「福祉・ケア」「経済・開発」といったあたりが注目されます。

こうやって、縦糸と横糸のクロスするところを探していくわけです。その結果、たとえば「雇用関係総論」「社会政策総論」「生活保障論」「スポーツ社会学の基礎」…といった一連の科目がたちどころにリストアップされることとなります。

■ グローバル・リーダーズ・プログラムが世界への扉を開く！

社会学部では、2017年度よりグローバル・リーダーズ・プログラム（GLP）を開始しました。このプログラムの目的は、現代社会が直面している課題に対し、グローバルな市民社会のリーダーを育成することにあります。そのため、英語および英語以外の外国語の運用能力を鍛えるとともに、地球規模の課題の解決に挑むための教養・思考力・構想力・実行力を涵養するプログラムになっています。少人数による「GLPセミナーⅠ・Ⅱ」やレクチャーシリーズを自ら企画する「企画と実践Ⅰ・Ⅱ」といった英語の活用に重点を置いた授業も用意されています。

GLPに指定された授業を履修すると「GLP 修了証書」が授与されます。修了要件は、①GLP 指定科目 36 単位を修得、②4 か月以上の海外留学、③社会学部の卒業要件を満たす、です。また、GLP選抜学生にも、学部・大学院5年一貫教育プログラムによる修士号取得の道が開かれています。

GLPには、1年次終了時に12名程度が選抜されます。例年11月より出願案内が公開され、1月上旬に出願に必要な資料を提出します。1月上旬に第1次審査（書類選考）を実施、1月中旬に第2次審査（面接試験）を実施、3月中旬に最終合格者を発表します。このスケジュールは年度によって変更があるかもしれません。社会学部のHPで最新の情報を確認してください。

■ 学部・大学院修士課程5年一貫教育プログラム

一橋大学大学院社会学研究科は、学部と大学院修士課程での教育をより密接に接続することによって、研究者または高度職業人を目指す優秀な社会学部在籍者が、より専門的な教育を受け、かつ、早期のキャリアアップを可能にするため、2019年度より「学部・大学院修士課程5年一貫教育プログラム」を開始しました。このプログラムにより、学部4年次に大学院の授業の正規履修が可能となるだけでなく、修士課程を実質的に1年間で修了することが可能になります。

学部教育と大学院教育を融合させた密度の濃い教育によって、高度職業人を目指す学生にとっても研究者を目指す学生にとっても、個々のキャリア形成において求められる専門知識、思考力、分析力、アウトプット力を短期間で修得することができるプログラムです。本プログラムの履修を希望する学生は、社会学部3年次の1月に選抜試験を受験し、合格する必要があります。選抜試験に合格してプログラム

履修資格者となった学生は、学部4年次に学部授業だけでなく大学院授業を履修することができます。プログラム履修資格者は、学部4年次修了時に卒業論文を含む学部卒業単位を取得して学士号（「学士（社会学）」）を取得します。大学院教育のカリキュラムとしては、概ね学部4年次は修士課程1年次、修士課程1年次は同2年次と同等とみなし、修士課程の必修科目はそれに基づき履修します。プログラム履修資格者は、学部4年次に社会学研究科大学院修士課程入学試験を受験し合格することで、修士課程1年間での修士号（「修士（社会学）」）取得の資格が与えられます。詳しい情報は社会学研究科のHPをご覧ください。

■あなただけの「マイ・カリキュラム」を

ひと言で「問題意識」といっても、漠然としたものから、極めて特殊で明確なものまで、いろいろあるでしょう。200人の学生がいれば200の問題意識があっても不思議ではありません。あるいは、ひとりの頭のなかにいくつかの問題意識がひしめきあっているというのもよくあることです。それらひとつひとつに対応するカリキュラムを例示することはできませんが、上の例を参考にして、自分にとってもっとも切実な問題をあぶりだし、それを社会学部の科目群やキーワードに翻訳すると何になるのかを考えてみてください。そうやって、横糸と縦糸をクロスさせながら、あなただけの「マイ・カリキュラム」を編み上げていってください。



社会学部教員一覧

氏名	職位	専門分野・研究領域	2026年度担当の学部教育科目
社会学研究分野			
菊谷 和宏	教授	社会学史、社会理論	社会科学概論Ⅰ、社会研究入門ゼミナール、社会学史
佐藤 圭一	准教授	政治社会学、環境社会学、社会ネットワーク分析、計量社会学	環境社会学、社会ネットワーク分析
数土 直紀	教授	計量社会学、社会階層論	社会科学概論Ⅰ、量的データ解析法Ⅰ、社会階層論
多田 治	教授	文化の社会学、社会理論、観光研究	社会学概論、社会学理論、社会の構造と変動 A
林 真人	准教授	都市社会学、地域社会学、批判主義都市研究	社会研究入門ゼミナール、都市社会学 B
飯尾 真貴子	専任講師	国際社会学、国際移動研究、移民政策論	Introductory Seminar in Transnational Sociology A、国際社会学 A
竹中 歩	教授	都市社会学、国際社会学	Introductory Seminar in Transnational Sociology B、都市のエスノグラフィ
佐藤 文香	教授	ジェンダーの社会理論・社会学、軍隊・戦争の社会学	社会研究入門ゼミナール、ジェンダーと社会
田中 亜以子	専任講師	ジェンダー・セクシュアリティ研究、歴史社会学	社会研究入門ゼミナール、ジェンダー史特論
根本 雅也	専任講師	歴史社会学、質的調査法	歴史社会学、質的調査研究
山田 哲也（兼任）	教授	教育社会学	社会科学概論Ⅱ、社会研究入門ゼミナール
西野 史子（兼任）	教授	雇用関係、労働社会学	社会研究入門ゼミナール、雇用関係総論、雇用関係特論
松永 伸太郎（兼任）	専任講師	労働過程論、エスノメソドロジー、労働社会学	導入ゼミナール
坂 なつこ（兼任）	教授	スポーツ社会学	—

共生社会研究分野			
中田 康彦	教授	教育社会学	教育と社会
山田 哲也	教授	教育社会学	社会科学概論Ⅱ、社会研究入門ゼミナール
太田 美幸	教授	教育社会学	教育の歴史、まちづくりとコミュニティ・ビジネス
宮地 尚子	特任教授	文化精神医学、医療人類学	共生社会論
坂 なつこ	教授	スポーツ社会学	—
鈴木 直文	教授	スポーツ社会学	スポーツと開発、スポーツ政策論
鈴木 楓太	准教授	スポーツ社会学	スポーツの歴史、スポーツ社会学の基礎
猪飼 周平	教授	社会政策研究、ヘルスケア政策	生活保障論、社会政策特論
白瀬 由美香	教授	社会福祉研究	社会政策総論、社会福祉
西野 史子	教授	雇用関係、労働社会学	雇用関係総論、雇用関係特論、社会研究入門ゼミナール
松永 伸太郎	専任講師	労働過程論、エスノメソドロジー、労働社会学	導入ゼミナール
堂免 隆浩	教授	都市政策、地域政策	都市・地域政策総論、都市・地域政策特論、不動産の社会科学

歴史社会文化研究分野			
石居 人也	教授	日本史、日本近現代史	導入ゼミナール、日本社会史総論 A
鈴木 直樹	専任講師	日本史、日本近世史	史料講読（日本） B
加藤 祐介	専任講師	日本史、日本政治史	導入ゼミナール、日本政治史総論
洪 郁如	教授	アジア史、台湾近現代史、日台関係史	社会文化論原典講読 C

佐藤 仁史	教授	アジア史、中国近世・近現代史、 日中関係史	アジア史総論 B、社会研究入門ゼミナール
加藤 圭木	教授	アジア史、朝鮮近現代史、 日本の戦争・植民地支配	史料講読（アジア）A、アジア史特論 A、 海外短期調査（韓国）
中野 聡		アメリカ史、国際関係史	—
貴堂 嘉之	教授	アメリカ史、人種・ジェンダー・ エスニシティ研究	アメリカ史総論 A
牧田 義也	専任講師	アメリカ史、グローバルヒストリー	Topics of Modern and Contemporary History B、導入ゼミナール
秋山 晋吾	教授	ヨーロッパ史、東ヨーロッパ 地域研究	社会研究入門ゼミナール
小西 正紘	専任講師	ヨーロッパ史、近代イギリス史、 民衆史	ヨーロッパ史総論 B、導入ゼミナール
柏崎 正憲	専任講師	社会思想史、経済学史	導入ゼミナール、社会思想史特論、社会思想史原典講読
井頭 昌彦	教授	哲学・倫理学	社会哲学
吉沢 文武	准教授	哲学・倫理学	社会倫理学、倫理学特論
井川 ちとせ	教授	英語圏文芸思想	—
寺尾 智史	教授	言語社会学、情報社会学	社会科学概論Ⅱ、社会と文化 E
田中 亜以子 (兼任)	専任講師	ジェンダー・セクシュアリティ の歴史、近現代日本	ジェンダー史特論

超域社会研究分野			
田中 拓道	教授	政治学	社会研究入門ゼミナール、政治思想、 比較政治
ジョナサン・ルイス	教授	政治学	政治と社会、Political Communication、 Media Research Methods
福富 満久	教授	国際政治学、国際関係論	国際正義論、国際平和論

小椋 郁馬	専任講師	政治学、政治行動論	政治学、Political Behavior
稲葉 哲郎	教授	社会心理学、政治コミュニケーション	ジャーナリズム実践論
宮本 百合	教授	社会心理学、文化心理学	導入ゼミナール、 Cultural Psychology
後藤 伸彦	専任講師	社会心理学、消費者行動	社会研究入門ゼミナール、Social Psychological Perspectives on Health
大杉 高司	教授	社会人類学、ラテンアメリカ・ カリブ海地域研究	社会人類学総論 B、現代人類学特論 B
久保 明教	教授	社会人類学、科学技術社会論	人類学概論、周辺状況の諸問題 A
上田 元	教授	社会地理学、アフリカ地域研究	人文地理学総論 A
小泉 佑介	専任講師	社会地理学、東南アジア地域研究	社会研究入門ゼミナール、人文地理学 特論 B、地域研究 B
大坪 俊通	教授	地球科学、宇宙測地学	—
大瀧 友里奈	教授	環境科学、環境配慮行動	—
赤嶺 淳	教授	フードスタディーズ、グローバル スタディーズ	社会研究入門ゼミナール、Conservation in Global Foodways、地球環境と地域 社会
鈴木 直文（兼任）	教授	スポーツ社会学	スポーツと開発、スポーツ政策論

2026 年度版社会学部・学部教育科目履修ガイド (履修キーワードと科目群)

[学部基礎科目]

	社会学研究分野	共生社会研究分野	歴史社会文化研究分野	超域社会研究分野	科目群外講義分野
文化	社会学理論 社会調査論 社会調査法 I 歴史社会学 都市社会学 国際社会学 A	教育の社会学 教育の歴史 スポーツ社会学の基礎 共生社会論 生活保障論 都市・地域政策総論 不動産の社会科学	社会思想 B 史料講読 (ヨーロッパ) B ヨーロッパ史総論 B 社会と文化 A 社会と文化 E ことばと社会 日本社会史総論	社会心理学 II (心理的分野) 社会人類学総論 B	GLP セミナー I
言語・コミュニケーション	社会調査論 社会調査法 I	教育の社会学	社会と文化 A ことばと社会 音声学	社会心理学 II (心理的分野) 社会人類学総論 B	GLP セミナー I English Skills for Social Sciences
エスニシティ	社会調査論 歴史社会学 国際社会学 A	教育の社会学 教育の歴史 共生社会論 社会政策総論 雇用関係総論	史料講読 (アメリカ) A アメリカ史総論 A ことばと社会 音声学		GLP セミナー I
ジェンダー・セクシュアリティ	社会階層論 ジェンダーと社会	教育の社会学 教育の歴史 スポーツ社会学の基礎 共生社会論 社会政策総論 生活保障論 雇用関係総論	史料講読 (アメリカ) A アメリカ史総論 A アジア史総論 A ことばと社会	政治思想	GLP セミナー I 海外短期調査 (韓国)
国家・市民社会・公共性	社会学理論 社会学史 環境社会学 社会階層論 歴史社会学 都市社会学 国際社会学 A	教育の社会学 教育の歴史 スポーツ社会学の基礎 共生社会論 社会政策総論 生活保障論 雇用関係総論 都市・地域政策総論 不動産の社会科学	社会思想 B アジア史総論 A 史料講読 (アメリカ) A 史料講読 (アジア) A 史料講読 (ヨーロッパ) B ヨーロッパ史総論 B 社会と文化 E 社会と文化 A ことばと社会 日本社会史総論 日本政治史総論 社会倫理学	政治学 政治思想 国際平和論	GLP セミナー I 海外短期調査 (韓国)
情報・メディア	社会学理論 社会調査論 社会調査法 I 社会調査法 II 量的データ解析法 I		史料講読 (アメリカ) A 社会と文化 E 社会と文化 A ことばと社会 音声学	政治学	GLP セミナー I
	社会学研究分野	共生社会研究分野	歴史社会文化研究分野	超域社会研究分野	科目群外講義分野

	社会学研究分野	共生社会研究分野	歴史社会文化研究分野	超域社会研究分野	科目群外講義分野
人権	社会調査論 社会調査法 I Transnational Sociology : Global Issues	教育の社会学 教育の歴史 社会政策総論 生活保障論 雇用関係総論 都市・地域政策総論	アジア史総論 A 日本社会史総論 日本政治史総論 社会思想 B ことばと社会	国際平和論	GLP セミナー I 海外短期調査 (韓国)
福祉・ケア	社会調査論	教育の社会学 社会政策総論 生活保障論 雇用関係総論 都市・地域政策総論 不動産の社会科学	史料講読 (アメリカ) A ことばと社会 音声学	政治思想	GLP セミナー I
グローバル化	環境社会学 歴史社会学 国際社会学 A	教育の社会学 教育の歴史 スポーツ社会学の基礎 共生社会学 社会政策総論 雇用関係総論 都市・地域政策総論 不動産の社会科学	ことばと社会 アジア史総論 A 史料講読 (アメリカ) A	政治学 人文地理学総論 A 国際平和論	GLP セミナー I
環境	環境社会学 社会調査論	教育の歴史 都市・地域政策総論 不動産の社会科学	史料講読 (日本) B 日本社会史総論	人文地理学総論 A	GLP セミナー I
経済・開発	社会学理論 環境社会学 社会階層論 都市社会学	教育の社会学 教育の歴史 雇用関係総論 都市・地域政策総論 不動産の社会科学	史料講読 (日本) B 史料講読 (アジア) A ことばと社会	人文地理学総論 A 国際平和論	GLP セミナー I
平和・紛争・暴力	社会調査論 歴史社会学 国際社会学 A	スポーツ社会学の基礎 共生社会学 都市・地域政策総論	アジア史総論 A 史料講読 (アメリカ) A ヨーロッパ史総論 B	国際平和論	GLP セミナー I 海外短期調査 (韓国)
	社会学研究分野	共生社会研究分野	歴史社会文化研究分野	超域社会研究分野	科目群外講義分野

[学部発展科目]

	社会学研究分野	共生社会学研究分野	歴史社会文化研究分野	超域社会学研究分野	科目群外講義分野
文化	社会の構造と変動 A 質的調査研究	教育社会学特論 比較・国際教育学 スポーツの歴史 社会政策特論	倫理学特論 ジェンダー史特論 言語社会学 A 言語社会学特論 A	周辺状況の諸問題 A 現代人類学特論 B Cultural Psychology	GLP セミナー II A、GLP セミ ナー II B 企画と実践 I 企画と実践 II
言語・コミュニケーション	社会の構造と変動 A 社会ネットワーク分析 質的調査研究	教育社会学特論 比較・国際教育学	社会思想史原典講読 言語社会学 A 言語社会学特論 A ヨーロッパ史特論 B	現代人類学特論 A Cultural Psychology	GLP セミナー II A、GLP セミ ナー II B 企画と実践 I 企画と実践 II 発信英語力 A (Discussion & Presentation 1) 発信英語力 D (Academic Writing 1)
エスニシティ	都市のエスノグラフィ	教育社会学特論 比較・国際教育学 雇用関係特論	アメリカ史特論 A Topics of Modern and Contemporary History B 言語社会学 A 言語社会学特論 A ヨーロッパ史特論 B	Cultural Psychology	GLP セミナー II A、GLP セミ ナー II B 企画と実践 I 企画と実践 II
ジェンダー・セクシュアリティ	質的調査研究 ジェンダー論	教育社会学特論 比較・国際教育学 社会政策特論 社会福祉 スポーツの歴史 雇用関係特論	アメリカ史特論 A ジェンダー史特論 Topics of Modern and Contemporary History B 言語社会学 A 言語社会学特論 A	比較政治	GLP セミナー II A、GLP セミ ナー II B 企画と実践 I 企画と実践 II
国家・市民社会・公共性	質的調査研究 都市のエスノグラフィ ジェンダー論	教育政策 教育社会学特論 比較・国際教育学 スポーツ政策論 社会政策特論 社会福祉 雇用関係特論 都市・地域政策特論	社会思想史特論 社会思想史原典講読 社会文化論原典講読 C アメリカ史特論 A 倫理学特論 ジェンダー史特論 Topics of Modern and Contemporary History B 言語社会学 A 言語社会学特論 B	Political Behavior 比較政治 国際社会開発論 A 国際正義論	GLP セミナー II A、GLP セミ ナー II B 企画と実践 I 企画と実践 II セミナーシリーズ (Political Sociology Seminar)
	社会学研究分野	共生社会学研究分野	歴史社会文化研究分野	超域社会学研究分野	科目群外講義分野

	社会学研究分野	共生社会研究分野	歴史社会文化研究分野	超域社会研究分野	科目群外講義分野
情報・メディア	社会の構造と変動 A 社会ネットワーク分析 質的調査研究		Topics of Modern and Contemporary History B 言語社会学 A 言語社会学特論 A	Political Behavior	GLP セミナー II A、GLP セミ ナー II B 企画と実践 I 企画と実践 II
人権	質的調査研究 都市のエスノグラフィ	教育社会学特論 スポーツ政策論 社会政策特論 社会福祉 雇用関係特論 都市・地域政策特論	社会思想史特論 アメリカ史特論 A Topics of Modern and Contemporary History B 言語社会学 A 言語社会学特論 A	国際正義論	GLP セミナー II A、GLP セミ ナー II B 企画と実践 I 企画と実践 II
福祉・ケア	質的調査研究 ジェンダー論 都市のエスノグラフィ	教育社会学特論 スポーツ政策論 社会政策特論 社会福祉 雇用関係特論 都市・地域政策特論	アメリカ史特論 A Topics of Modern and Contemporary History B 言語社会学 A 言語社会学特論 A	Social Psychological Perspectives on Health 比較政治	GLP セミナー II A、GLP セミ ナー II B 企画と実践 I 企画と実践 II セミナーシリーズ (Political Sociology Seminar)
グローバルイゼーション	社会の構造と変動 A 都市のエスノグラフィ	教育社会学特論 比較・国際教育学 スポーツの歴史 スポーツ政策論 雇用関係特論 都市・地域政策特論	アメリカ史特論 A Topics of Modern and Contemporary History B 言語社会学 A 言語社会学特論 A	国際社会開発論 A 周辺状況の諸問題 A Cultural Psychology 国際正義論 比較政治	GLP セミナー II A、GLP セミ ナー II B 企画と実践 I 企画と実践 II
環境	質的調査研究	比較・国際教育学 スポーツ政策論 都市・地域政策特論		国際社会開発論 A	GLP セミナー II A、GLP セミ ナー II B 企画と実践 I 企画と実践 II
経済・開発	社会の構造と変動 A 都市のエスノグラフィ	教育社会学特論 比較・国際教育学 雇用関係特論 都市・地域政策特論	アメリカ史特論 A	国際社会開発論 A 国際正義論	GLP セミナー II A、GLP セミ ナー II B 企画と実践 I 企画と実践 II
平和・紛争・暴力	質的調査研究 ジェンダー論 都市のエスノグラフィ	スポーツの歴史 比較・国際教育学 都市・地域政策特論	社会思想史特論 アメリカ史特論 A Topics of Modern and Contemporary History B	国際正義論	GLP セミナー II A、GLP セミ ナー II B 企画と実践 I 企画と実践 II セミナーシリーズ (Political Sociology Seminar)
	社会学研究分野	共生社会研究分野	歴史社会文化研究分野	超域社会研究分野	科目群外講義分野

社会学部科目（2026年度非開講のものも含まれます）

学部導入科目		
社会研究の世界 導入ゼミナールⅠ・Ⅱ 社会科学概論Ⅰ・Ⅱ 社会研究入門ゼミナール 社会学概論 哲学概論 倫理学概論 人類学概論 教育と社会 政治と社会 ジェンダー／セクシュアリティとライフデザイン まちづくりとコミュニティ・ビジネス Introductory Seminar in Transnational Sociology A・B		
	学部基礎科目	学部発展科目
(社会学研究分野)	社会学理論 社会学史 社会階層論 社会調査論 社会調査法Ⅰ・Ⅱ 量的データ解析法Ⅰ 環境社会学 歴史社会学 都市社会学 A・B 国際社会学 A・B・C Transnational Sociology : Global Issues ジェンダーと社会	社会の構造と変動 A・B・C 社会ネットワーク分析 質的調査研究 量的データ解析法Ⅱ 都市のエスノグラフィ 国際社会と文化 A・B 国際社会の課題 A・B ジェンダー論 ジェンダー史特論 Gender and Japanese Society
(共生社会研究分野)	教育の社会学 A・B・C 教育の歴史 共生社会論 スポーツ社会学の基礎 社会政策総論 生活保障論 雇用関係総論 都市・地域政策総論 不動産の社会科学	教育政策 教育社会学特論 比較・国際教育学 スポーツの歴史 スポーツ文化論 スポーツと開発 スポーツ政策論 社会政策特論 社会福祉 雇用関係特論 都市・地域政策特論
(歴史社会文化研究分野)	史料講読（日本） A・B・C 史料講読（アジア） A・B 史料講読（ヨーロッパ） A・B 史料講読（アメリカ） A・B 日本社会史総論 A・B・C・D	日本社会史特論 A・B 日本政治史特論 アジア史特論 A・B ヨーロッパ史特論 A・B アメリカ史特論 A・B・C・D

	学部基礎科目	学部発展科目
	アジア史総論 A・B ヨーロッパ史総論 A・B アメリカ史総論 A・B 日本政治史総論 社会哲学 社会倫理学 社会思想 A・B 社会と文化 A・B・E 音声学 ことばと社会	ジェンダー史特論 Topics of Modern and Contemporary History A・B 倫理学特論 哲学特論 社会思想史特論 社会思想史原典講読 社会文化論原典講読 B・C 言語社会学 A・B 言語社会学特論 A・B
(超域社会研究分野)	社会心理学 I (社会的分野) 社会心理学 II (心理的分野) マスコミュニケーション基礎論 社会人類学総論 A・B 政治学 政治思想 国際平和論 Political Communication 人文地理学総論 A・B 地域研究 A・B Conservation in Global Foodways	Cultural Psychology Social Psychological Perspectives on Health Biological Psychology Cognitive Neuroscience Cultural Neuroscience Data Analysis and Presentation 現代人類学特論 A・B エスノグラフィ A・B 周辺状況の諸問題 A・B・C Political Behavior 比較政治 国際正義論 Media Research Methods 国際社会開発論 A・B 人文地理学特論 A・B 地球環境と地域社会 スポーツと開発 ジェンダーとセクシュアリティの心理学

(科目群外講義分野)	不動産の社会科学(三井不動産寄附講義) GLP セミナー I English Skills for Social Sciences Topics in Social Sciences I・II・III	企画と実践 I・II GLP セミナー II A・II B デジタルメディアの実践 I・II Topics in Global Studies A・B・C・D・E 環境をめぐる問題と実践 文化交流の技法と実践 国際協力の実務と方法 発信英語力 A (Discussion & Presentation1) 発信英語力 D (Academic Writing1) ジャーナリズム実践論(朝日新聞寄附講義) セミナーシリーズ(国際社会学セミナー) 海外短期調査(韓国)
------------	---	---

科目群ごとの履修モデル

・ 社会学研究分野 ・

「社会学研究分野」は、社会の構造とその動態を総合的に明らかにし、学んでいくためのユニットです。この分野の教員の専門は、社会学史、社会理論、政治社会学、環境社会学、社会ネットワーク分析、計量社会学、社会階層論、文化の社会学、観光研究、都市社会学、国際社会学、国際移動研究、移民政策論、ジェンダーの社会理論、ジェンダー・セクシュアリティ研究、歴史社会学、戦争社会学、教育社会学、労働社会学、スポーツ社会学など多岐にわたっています。



社会は変わる、そして変えられる——
新宿アルタ前で行われた脱原発集会に
参加する人々



調査すべき「社会」は足もとに広がる——
コロナ禍における一橋大生の学生生活と友
人関係に関する調査票調査



ジェンダー研究のゼミに所属していることで友人・知
人から投げかけられた質問に回答するQ&A集『ジェン
ダーについて大学生が真剣に考えてみた』を出版



日系ブラジル人の歴史と多文化共生の実践についての
学びを深める国際社会学ゼミ生たち——群馬県大泉市
のフィールドワークから

1 社会学の考え方

社会学は、「さまざまな社会現象を、人間生活の共同という視角から研究する社会科学の一分野」を意味します。したがって社会学は、ミクロからマクロに至る多様な社会現象に取り組むことになります。しかしそれらはいずれも、次の問いに対する答えを探っていると言えます。

第一の問い：人はなぜ、共同し合うのか？

人間は、共同することによって、一人では実現できなかった大きな夢や目標を達成することが可能になる。それを支える仕組みはいったい何か。人々を「つなげる」ものとは何か。

第二の問い：人はなぜ、自分で作ったはずの社会によって、逆に不自由になってしまうのか？

しかし、こうして生まれた仕組みは、いつの間にか人間にとって疎遠なものとなり、むしろ多くの不自由をもたらす固い殻（＝構造）になってしまう。それはなぜなのか。

第三の問い：人はどのようにして、社会を変えていくことができるのか？

冷たく固い殻になってしまった社会を、人はいかに変えていくことができるのか。そのための条件とはいったい何だろうか。

そして、これらの問いに答えを与えていくためには、さまざまな社会現象に関心をもち、それを解き明かすために必要な理論と方法をしっかりと習得し、さらに具体的なトピックに向けて習得した理論と方法を適用していくことが必要になります。

2. 学び方

上の課題に取り組み、それを深めていくためには、自分がどのような社会現象に関心をもっているのかを自覚し、以下の科目群を体系的に学んでいくことが求められます。

1) 社会学的思考法の歴史、理論的基礎に関する科目群

取り上げる対象が多岐にわたる社会学ですが、その背後には社会学共通の思考法があり、それは歴史的な蓄積を踏まえています。社会学理論を学ぶことで、バラバラに見えていた社会現象のつながりを理解すると同時に、その「まとまって」見えるようになった社会現象の見方には、実は非常に多様な理論的視角があることを理解できるようになります。

2) 社会学的思考法をもとに各自が関心をもつテーマ・分野に関する知識を深める科目群

社会学理論は社会学史を通じて学ぶことができますが、現実の社会との対話を通じてアップデートしていくことが欠かせません。計測可能な数値を用いる数理社会学や計量社会学、歴史的な視角から社会の変動を分析する歴史社会学、特定の地域に注目してなされる都市社会学、他にも、政治社会学、環境社会学、社会階層論、文化の社会学、観光研究、国際社会学、ジェンダー・セクシュアリティ研究、戦争社会学、教育社会学、労働社会学、スポーツ社会学などがあり、それぞれのテーマや領域に焦点をあてながら、現状の社会の仕組みのあり方とその変動可能性を分析していきます。

3) 社会分析・社会調査の方法に関する科目群

理論と実証の対話は、きちんとした方法に基づいてこそ成り立つものです。社会調査とは、社会学徒のみならずひろく社会学者が、社会の仕組みや人びとの暮らしの現実をさぐり、人間の行為とそれを

支える論理に分け入っていくため、対象について調査・観察し、その結果を記述・分析していく営みと方法のことです。

3. 履修モデル

以下、この三つの科目群をもとに、それぞれの学び方、履修モデルをいくつか例示していきます。

●モデル1（社会学全般）

これらの組み合わせ方は、各自が選ぶ研究テーマによって違いが出てきます。理論と実証に関しては、Sociologyとしての社会学関連分野を並べていますが、この他にも本学には非常に多くの社会学関連科目が開講されています。自身の問題関心にしたがって、これらの関連科目も積極的に履修することを勧めます。

学年	社会学に關係する科目			関連科目
	社会学理論	理論と実証	社会調査法	
1年	社会科学概論Ⅰ・Ⅱ 社会学概論 導入ゼミナール 社会研究入門ゼミナール			教養ゼミナール
2年	社会研究入門ゼミナール			社会思想 ことばと社会 社会心理学Ⅰ（社会的分野） マスコミュニケーション基礎論 政治学
	社会学理論 社会学史 歴史社会学	社会階層論 ジェンダーと社会 国際社会学 教育の社会学 雇用関係総論 スポーツ社会学の 基礎	社会調査論 社会調査法Ⅰ・Ⅱ 量的データ解析法Ⅰ	
3年	社会の構造と変動	都市社会学 社会ネットワーク 分析 ジェンダー論 教育社会学特論	質的調査研究 量的データ解析法Ⅱ	社会思想史特論 Political Behavior 比較政治 スポーツ文化論 法社会学（法）
	ゼミナール			
4年	同上	同上	同上	
	ゼミナール 卒業論文			

注1：学年配当は一応の目安です。学部基礎科目・学部発展科目など学年指定がある場合に注意してください。

注2：社会学を学ぶ上で役に立つ関連科目等（他学部を含む）も含めてあります。

注3：このほか、特定の地域や時代を研究対象とする場合は、関連する外国語、文化、歴史に関する科目を履修することが望まれます。

●モデル2（国際社会学を中心に）

国際社会学は、従来の国民国家を中心とした社会の枠組みをすり抜ける国民国家の境界を超えた社会現象に着目し、それが引き起こす変動の分析を特徴とする分野です。従来の社会学が発展させてきた様々な分析の発想や道具を受け継ぎながら、具体的には移民・難民といった越境的な人の移動、国境を超える政治や社会運動、文化実践、あるいは地域統合の動きなどに注目し、国民国家それ自体を相対化する視点を養っていきます。

学年	社会学部の科目			他学部 の 関連科目
	社会科学全般の 前提科目や関連科目	社会学領域の科目		
		社会学領域の科目	国際社会学科目	
1年	社会科学概論Ⅰ・Ⅱ	社会学概論	社会研究入門ゼミナール (国際社会学担当教員)	現代国際社会と政治(法)
2年	社会人類学総論 アメリカ史総論	社会学理論 社会調査論 社会学史 社会階層論	国際社会学 社会研究入門ゼミナール (国際社会学担当教員) Introductory Seminar in Transnational Sociology 都市社会学 Transnational Sociology : Global Issues	国際政治理論(法) 国際安全保障(法) 国際政治経済(法)
3年	国際開発論 アメリカ史特論	社会の構造と変動 都市社会学 ジェンダー論 社会ネットワーク分析	国際社会と文化 国際社会の課題 ゼミナール 都市のエスノグラフィ (国際社会学担当教員)	国際政治経済研究(法)
4年	同上	同上	同上 + 卒論	同上

●モデル3（ジェンダー研究を中心に）

ジェンダー研究は、女性学を出発点として、1970年代以降に急成長した研究分野です。家事や育児、恋愛、生殖、身体、性など、近代社会において「女」の領域に位置づけられ、十分に社会科学的な分析の対象とされてこなかった主題に光をあてるとともに、一見ジェンダーとは無関係に見える領域にも鋭い分析のメスを入れてきました。女性や性的マイノリティだけではなく、人間の「標準」とされてきた男性や、「正常」とされてきた異性愛者をも批判的研究の対象とすることで、ジェンダーの権力関係を見据える視点を養っていきます。

学年	社会学部の科目			他学部 ジェンダー教育プログラム
	社会科学全般の 前提科目や関連科目	社会学領域の科目		
		社会学領域の科目	ジェンダー研究関連科目	
1年	社会科学概論Ⅰ・Ⅱ 導入ゼミナール	社会学概論	ジェンダー／セクシュアリティとライフデザイン	ヒューマンセクソロジー ジェンダーと人権 ジェンダーから世界を読む
2年	日本史総論 アジア史総論 アメリカ史総論 ヨーロッパ史総論 雇用関係総論	社会学理論 社会調査論 社会学史 社会階層論	ジェンダーと社会 社会研究入門ゼミナール (ジェンダー研究担当教員)	同上
3年	日本史特論 アジア史特論 アメリカ史特論 ヨーロッパ史特論 社会福祉	社会の構造と変動 質的調査研究	ジェンダー論 ジェンダー史特論 ジェンダーとセクシュアリティの心理学 Gender and Japanese Society ゼミナール (ジェンダー研究担当教員)	ジェンダーと法
4年	同上	同上	同上 + 卒論	同上

4. 社会調査士資格について

一橋大学社会学部では、社会調査に必要な科目を多面的に学ぶカリキュラムを用意しています。これらは、一般社団法人社会調査協会が認定する「社会調査士」という資格制度にも対応したカリキュラムとなっていますので、これらの科目を体系的に学ぶことで社会調査のリテラシーを習得するだけでなく、社会調査士の資格取得の申請も可能になっています。

一般社団法人社会調査協会が定めている社会調査士の「標準カリキュラム」(A～G)と社会学部で開講する科目との対応関係はつぎのようになります。

学部基礎科目	社会調査論	A. 社会調査の基本的事項に関する科目
〃	社会調査法Ⅰ	B. 調査設計と実施方法に関する科目
〃	社会調査法Ⅱ	C. 基本的な資料とデータの分析に関する科目
〃	量的データ解析法Ⅰ	D. 社会調査に必要な統計学に関する科目
学部発展科目	量的データ解析法Ⅱ	E. 多変量解析の方法に関する科目
〃	質的調査研究	F. 質的な調査と分析の方法に関する科目
後期ゼミナール	一部の3年ゼミ	G. 社会調査を実際に経験し学習する科目

基礎科目と発展科目の配置、ならびに各科目の開講予定（毎年開講されるものと1年おきに開講されるもの、特定の年度のみ開講されるものがある）を考慮しながら、履修計画を立ててみるとよいでしょう。資格取得について詳しくは、本学社会調査士／専門社会調査士資格制度ホームページ（<https://www.soc.hit-u.ac.jp/~hccsr/>）、および一般社団法人社会調査協会ホームページ（<https://jasr.or.jp/>）を参照してください。

5. 最近の卒業論文

◆ 2024年度

- 過去との比較が生活満足度に及ぼす影響
- 社員の役職とワーク・エンゲイジメントの関係
- 現代日本社会における階層別政治意識
- テレワークの実施に影響する要素に関する考察
- 労働の質における企業規模間格差の検討
- 自死の危険性を評価するための指標の検討
- 未婚男性中高年者における介護不安の差異
- 日本における外国の国家と国民に対する評価の関係に関する研究
- 社会関係構築志向から考察する日本人の孤独・社会的孤立の文化的要因について
- 文化資本論において「意志」が果たす役割
- 社会的孤立と人付き合いへの意欲の関連性
- 専攻希望分化要因のジェンダー比較
- 『生理についてオープンな時代になった』は正しいのか——生理に関する草の根運動やSNSの分析から
- お笑い女性ファンに関する研究——女性ファンへのインタビューを通じて

- 女子校はいかにしてジェンダー平等に寄与するか——女子校教員の語りにみる女子校の意義
- 父親による『子殺し』事件の語られ方——新聞記事・雑誌記事の批判的言説分析から
- 表現の自由とジェンダー——健全な言論空間の維持を目指して
- 非モテの理想とする男性像——抱える苦悩についてのインタビュー調査を通じて
- 赤線地帯で働く売春女性及び街娼たちの語り
- 戦後日本における出産政策の変遷とその意図
- 体育会マネージャーの経験とその可能性
- 社会システムと「身体」: 後期ニクラス・ルーマンの解釈と発展
- スピノザ哲学における個別性の問題: 「エチカ」の考察を中心として
- E. ゴフマン「スティグマの社会学」における程度問題の検討
- 知を分かり合うこと: パラダイム論から社会学的思考まで
- ハリウッド映画から見る物語による感情と行為の変化
- 演劇における観客と俳優の共犯関係が生み出す体験: バタイコにおける力「force」を補助線として
- 通過型観光におけるみやげもの購買行動がもたらす真正な観光経験—高速道路のSA・PA 利用客のものがたりをもとに—
- 国内のサイファー（ラップ・ミュージックにおける）がその参加者に対して果たす機能とラップへの価値判断
- 着物レンタル・着物体験から見る中国人の没入型京都観光
- 社会で受け入れられている正義はどのように変わるのか—トランスジェンダーと教育現場での体罰に関する世代ごとのインタビューからの考察—
- 日本の競走馬の役割と語られ方の変遷—新聞・雑誌メディアと引退馬支援活動におけるイメージ—
- なぜ彼らは前向きでいられるのか?—精神障害者の生き抜く力とスポーツの役割—
- 地域住民にとっての伝統行事の位置づけ—佐倉の秋祭りを事例として—
- 東京郊外における公共交通分担率に影響を与える要因の分析と考察
- 日本の学校教育が政治的社会的問題に関心を持つ市民育成と国を良くすることに寄与しているかどうかを検証する
- Z世代の多様な消費行動: 情報源信頼と口コミ投稿動機が生み出す行動パターン
- ポストコロナ時代のオンライン授業の意義と展望: 学生の内面的特徴と生活状況の視点から
- 国際寮における多文化共生の実態と課題: 小平寮を事例とした考察
- 選択的夫婦別姓制度導入への反対論のロジック: 高市早苗、八木修次の言説分析を通して
- 留学生の永住権獲得プロセスにおける障壁と課題——カナダの高度技能移民政策、ポイントシステムに焦点をあてて
- 非正規移民と支援者の相互作用をめぐる考察——仮放免者の「抵抗」に着目して
- ロヒンギャディアスポラのエスニックロビー戦略——在日ビルマロヒンギャ協会を中心に

◆ 2023 年度

- 「死」に対する思考の転回による「生」の再構築: パンゲの三島研究に対する批判的検討を用いて
- 「友だち」の実態についての研究: 現代社会の友人関係と「ブルーピリオド」における友情の分析
- なぜ日本国民は、苛烈な人権制約を抱える「天皇制」を存続させているのか
- COVID-19 が若い女性に与えた整形観への変化
- 日本の新聞—コマ漫画における「風刺」の実態: 内容分析と共同通信社イラスト室インタビューから

の考察

- 「サッカー」と「女子サッカー」は違うのか：女性視点から考える「見るスポーツ」としての女子サッカーの特性
- 10・20代ジャニーズオタクにおける「リア恋」感情の実態
- VTuberが“コラボ”によって生み出すネットワーク：ネットワーク構造とアクターの持つ属性に注目して
- 震災伝承施設のあり方
- オタクは何故増加し、そのイメージはどのように変化していったのか
- 「上毛かるた」はどのように継承されるべきか
- シェア本棚がもたらすつながりと主体性
- 高齢者の生きがいにおける2003年と2013年の比較分析
- 結婚が主観的ウェルビーイングに与える影響
- 新型コロナウイルス感染症拡大前後における人々のつながりに関する満足感について
- 学歴格差意識の社会階層差
- 同性愛に対する寛容度の国際比較
- 大正期の雑誌における「男性美」「女性美」の描かれ方
- 母性批判の歴史と娘の登場
- 『主婦の友』から見る月経観
- 子どもへの投資意欲と少子化：生活期待水準の上昇メカニズムに関する実証的分析
- 同居家族構成別の生活満足度とその規定要因の分析
- 「金持ち喧嘩せず」は本当か：社会階層とメンタルヘルスに関する考察
- 実写版ディズニープリンセスに関する研究——プリンセス作品の実写化に対する反応を通じて
- Aスペクトラム・アイデンティティと当事者との関わり——Aスペクトラム当事者へのインタビュー調査を通じて
- 女性役員の登用と企業パフォーマンスの関係に関する実証分析
- 遺産化とナショナリズム——明治日本の産業革命遺産、産業遺産情報センター
- 日系ブラジル人のエスニック・ビジネスの展開と障壁——群馬県南部の事例を中心に
- 外国につながる若者の大学進学——横浜市鶴見区の事例からの考察
- 地域における公的な日本語教育の在り方——「地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」を事例として

6. 参考文献

- 数土直紀・山田真茂留（編）『アカデミックナビ 社会学』勁草書房、2025年
- 長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志『社会学 新版』有斐閣、2019年
- アンソニー・ギデンズ『社会学』（第5版）松尾精文他訳、而立書房、2009年
- 玉野和志『ブリッジブック 社会学』（第2版）信山社、2016年
- 中島道男・岡崎宏樹・小川伸彦・山田陽子（編）『社会学の基本——デュルケームの論点』学文社、2021年
- エミール・デュルケーム『社会学的方法の規準』菊谷和宏訳、講談社、2018年
- アルバート＝ラズロ・バラバシ『新ネットワーク思考』青木薫訳、NHK出版、2002年
- ランドル・コリンズ『脱常識の社会学 第二版』井上俊・磯部卓三訳、岩波書店、2013年

多田治『社会学理論のエッセンス』学文社、2011年
井坂康志・多田治『ドラッカー×社会学 コロナ後の知識社会へ』公人の友社、2021年
多田治『旅と理論の社会学講義』公人の友社、2023年
長谷川公一・品田知美『気候変動政策の社会学——日本は変われるのか』昭和堂、2016年
筒井淳也『仕事と家族——日本はなぜ働きづらく、産みにくいのか』岩波書店、2015年
永吉希久子『移民と日本社会』中央公論新社、2020年
梶田孝道（編）『新・国際社会学』名古屋大学出版会、2005年
宮島喬・佐藤成基・小ヶ谷千穂（編）『国際社会学』有斐閣、2015年
宮島喬・梶田孝道・小倉充夫・加納弘勝（監修）『講座 国際社会』（全7巻）東京大学出版会、2002年
小井土彰宏（編）『移民受入の国際社会学』名古屋大学出版会、2017年
森千香子『排除と抵抗の郊外——フランス〈移民〉集住地域の形成と変容』東京大学出版会、2016年
小泉康一（編）『「難民」をどう捉えるか——難民・強制移動研究の理論と方法』慶応義塾大学出版会、
2019年
佐藤文香監修／一橋大学社会学部佐藤文香ゼミ生一同『ジェンダーについて大学生が真剣に考えてみた
——あなたがあなたらしくいられるための29問』明石書店、2019年
伊藤公雄・牟田和恵・丸山里美編『ジェンダーで学ぶ社会学 第4版』世界思想社、2025年
加藤秀一『改定版 はじめてのジェンダー論』有斐閣、2025年
佐藤文香・千田有紀監編訳『フェミニズムから読みなおす インターセクショナリティ基本論文集』慶應
義塾大学出版会、2025年
山口みどり・弓削尚子・後藤絵美・長志珠絵・石川照子編著『論点・ジェンダー史学』ミネルヴァ書房、
2023年
アントワネット・バートン『ジェンダー史入門』高内悠貴訳、勁草書房、2025年
ポール・ウィリス『ハマータウンの野郎ども』ちくま学芸文庫、1996年
広田照幸『教育』（思考のフロンティア第Ⅱ期）岩波書店、2004年
濱口桂一郎『新しい労働社会——雇用システムの再構築へ』岩波新書、2009年
小川慎一・山田信行・金野美奈子・山下充『「働くこと」を社会学する——産業・労働社会学』有斐閣、
2015年

（事典など）

『社会学小辞典 新版増補版』有斐閣、2005年
『社会学文献事典 縮刷版』弘文堂、2014年
『現代社会学事典』弘文堂、2012年
『コミュニティ事典』春風社、2017年
『社会調査事典』丸善、2014年
『エッセンシャル 社会学事典：基礎・理論編』丸善、2025年

・ 共生社会研究分野 ・

「共生社会研究分野」の共通テーマは、人々のウェルビーイング（幸福）の達成と言えます。私たちは、日常生活の中で多様な活動を行っています。そして、多様な活動の集積を通じて、ウェルビーイングの達成が実現します。「共生社会研究分野」では、特に、「学ぶ」「健康を保つ」「世話をする」「働く」「人とつながる」「余暇を過ごす」などの、人々の日常生活における活動を対象とします。さらに、それぞれの活動のみに焦点を当てるのではなく、活動相互の関係性にも焦点をあてます。このような包括的な視点こそ、人々のウェルビーイングの達成を理解する上で重要です。

人々のウェルビーイングの達成を理解するためには、私たちが他者と「共生」している点も忘れてはいけません。私たちの活動は他者に影響を及ぼし、他者の活動は私たちに影響を及ぼします。そのため、他者の存在は、私たちのウェルビーイングの達成を促進／阻害する要因として検討対象から外すことができません。

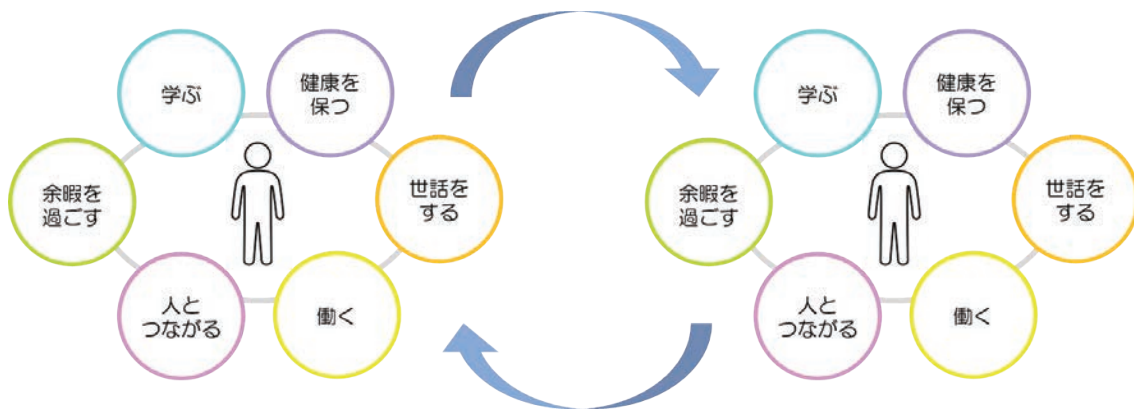


図 個人における日常的活動と他者との関係性

「共生社会研究分野」は、日常生活における人々の活動と対応する専門分野で構成されています。「学ぶ」が教育社会学など、「健康を保つ」が文化精神医学・医療政策など、「世話をする」が社会政策・社会福祉など、「働く」が雇用関係など、「人とつながる」がコミュニティ政策など、「余暇を過ごす」がスポーツ社会学など、とそれぞれ対応しています。さらに、人々のウェルビーイングの達成を理解し検討するためには、社会学部の全ての専門分野が関連しています。

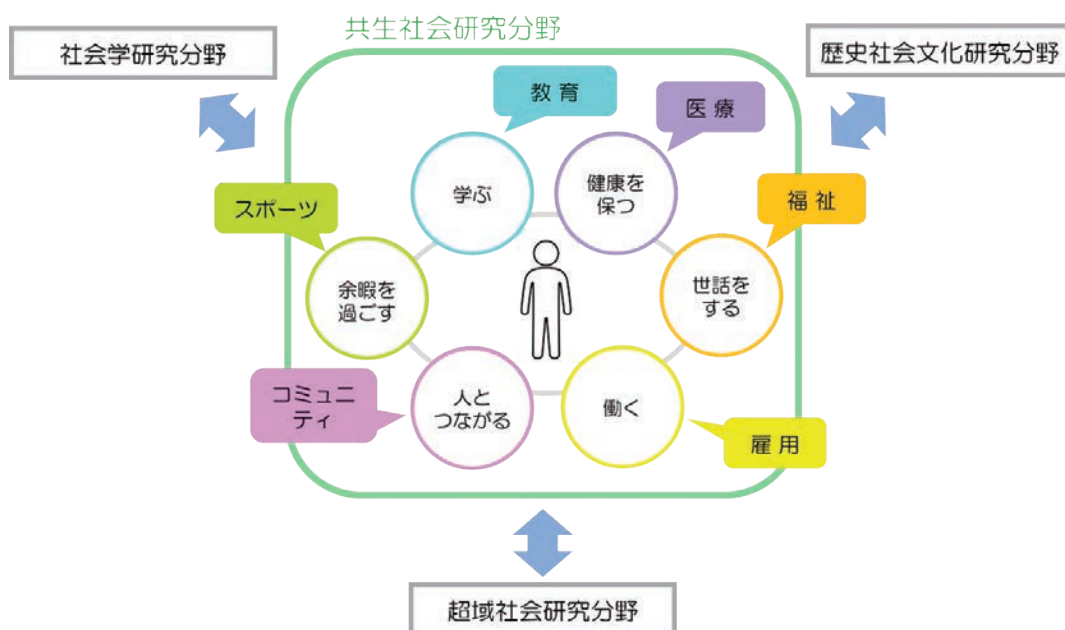


図 共生社会研究分野の専門分野と他の研究分野・専攻との関係

● 教育社会学

一橋大学で学ぶ教育社会学とは、社会科学の歴史の中で登場してきた教育社会学を継承するものですが、世にいう「教育社会学」を示すものではありません。通常の教育社会学を含みつつそれに限定されない、教育諸学の共同によって教育と社会との関連を問うていく広義の〈教育と社会〉学をめざしています。

一橋大学で学ぶ〈教育と社会〉学とは、歴史的現実のただなかを生きる力の形成という教育や人間形成という営み自体が社会的に規定されているという事実を看過し、社会から切り離して研究するものではありません。子ども・青年の発達問題のみならず、成人の生き方の問い直しをも射程に入れ、労働・生活のあり方と結びついたかたちで考えようというものです。

それは、社会変動のもとで教育と社会の関係の調整をはかる営みをどう解き明かすかという課題に取り組むことでもあります。やや難しくいえば、教育のあるべき姿から像を描こうとする目的規定と、教育の生きられた現実から像を描こうとする社会的規定の相克をどう解くか、ということだといえるでしょう。

〈教育と社会〉学を、狭い意味での教育の「あるべき」姿を追求する学問として考える必要はありません。「あるべき」姿の追求ももちろん可能ですし、狭い意味での教育社会学も含まれているわけですが、教育と社会のつなぎを考えるさまざまな視点が用意されています。

教育と社会の過去と未来の連関を考える思想史的研究、教育と社会のグローバルでエコロジカルな連関を追求する比較研究、人々によって生きられる過程に即した事実解明をめざす社会史的研究、教育の営みを社会的関係・構造の中でとらえなおそうとする社会学的研究、国家との関係で改革のダイナミズムをとらえようとする政策研究などがあります。



近年の卒業論文

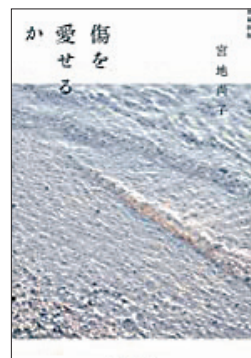
- ・ 学校教育を通じた若者の投票率向上の方策
- ・ 中国の就学前教育の変遷と今後の課題—「双减政策」に焦点をあてて
- ・ 「子どもの貧困」に対する教員の教育支援の構造に関する考察—貧困の可視化過程に注目して
- ・ ICT教育の導入によって変容する学校の役割—教育クラウドプラットフォームの導入に着目して
- ・ 義務教育段階の理系科目において男女差が生じるプロセスの解明
- ・ 主婦を生きる—「森遊びのおひさま組」の母親たちの生活史
- ・ 大学中退防止に向けた取り組み—学業への不適応に着目して
- ・ 日本の学校における性教育の課題と今後の展望
- ・ 母語教育に対する親の意識はどの要因によって規定されるのか—在日ミャンマー人を事例に
- ・ 公立小中学校でのオンライン学習の実践における課題
- ・ 公共図書館に青少年の「居場所」をつくる—武蔵野プレイスの「居場所づくり」活動から
- ・ CODAの自己肯定感に差異を与える要因の分析
- ・ 女子校出身者にリーダーは多いのか—出身学校と役職に着目して

●文化精神医学・医療人類学・トラウマ研究

社会や文化と「心」は、どんな関係にあるのか。文化精神医学・医療人類学・トラウマ研究は、この問いについて、医学と社会科学の境界線上にたちながら考えます。たとえば、自然災害や戦争、経済搾取、差別、環境破壊などの「悲惨な経験」が人間の精神に及ぼす影響、摂食障害や自傷、依存症、ひきこもりといった現象と社会や文化との関係などです。

何が疾患とされるのかは、社会や文化によって異なります。健康と病気の境界線、正常と異常の境界線も、文化や時代によって異なっています。医療の現場では、病気やけが、障害、老いといった領域を扱いますが、そこではおのずと人間のヴァルネラビリティ、弱さにかかわることにもなります。その弱さを規定するものは何でしょうか。弱さを抱えたまま生きていける世界を求めている人は多くいます。弱さを否定するのではなく、それを尊重し、それを抱えたまま強くある可能性について考えることが、今、求められています。それは、ケアとは何か、支援とは何か、エンパワメントとは何か、現代の競争社会のなかで異なる背景をもつ人たちがどう共に生きていくのか、といった問いにもつながっていきます。

こうした研究は、学問の境界線上にたち、現代社会において分断されている知のあり方を問い直すこと、臨床やフィールドワークを通して、学問領域ごとに異なる価値観を相対化していくこととも不可分です。アカデミズムにおいては、領域を限定し、狭く深くというアプローチのほうが一般的ですが、どんな問題であっても一つの学問の枠組みだけでは解決が付きません。問題の渦中にある人々のリアリティに沿って誠実に知を生み出そうとすると、学問領域間の棲み分けが妨げになることもあります。タブー意識にとらわれず、領域横断的に、柔軟に思考することが、声を出しづらい人たちが不可視化されてきた人たちが生きやすい社会の展望を描くことにつながるのではないのでしょうか。



近年の卒業論文

- ・自由な大学生の生きづらさについて
- ・「話したくても話せない」場面緘黙とともに生きるということ—当事者の体験記の分析から
- ・Jリーグサポーターのつながりの熱狂的応援と社会的なつながりの解明
- ・20代女性における食と心の葛藤
- ・「社会的包摂」という概念の非行対策への可能性とBBS会でのフィールドワーク
- ・共感に着目した優しさの循環
- ・幼少期に受ける親からの影響とその後の変化：挫折経験に着目して
- ・幸福度の測られ方と指標の利用
- ・「女子」ブームを解く
- ・DV加害メカニズムについての考察
- ・精神保健医療における家族負担の社会的要因

● スポーツ社会学

イギリスを中心として成立したスポーツは、同じルールの下に、国境や民族を超えて誰もが勝敗を競え合えるユニバーサルな文化として、20世紀を通して地球的規模で普及し、発展を遂げました。そして現在、世界最大級のメガイベントとして人々を熱狂させているオリンピックやサッカー・ワールドカップに示されているように、スポーツは経済、政治、文化、メディア、教育等との結びつきをますます深めています。また、近代社会がもたらした運動不足やストレスの増大、あるいは自己実現や人間らしい生き方の追求などを背景にして、人々のスポーツをする・観る・読む・聞く等の要求もかつてなく高まりつつあります。

こうしてスポーツは、現代社会を読み解くひとつの重要な領域として、また、持続可能な人間と社会経済開発を促し、さらに恒久平和の構築のためのアイテムとしても脚光を浴びるようになってきました。そして、それらを総合的にとらえるスポーツの社会科学研究が切望されるようになってきています。

一橋大学におけるスポーツ社会学は、こうしたニーズに応えるべく設置された、全国的にも他に類をみないユニークな研究ユニットなのです。スポーツ社会学という名称を使っていますが、世にいうスポーツ社会学 = Sociology of Sport ではありません。「スポーツと社会の関連を問う」を基本理念としつつ、その内容は、社会学はもとより歴史学、教育学、文化研究、政策研究、開発研究、地域研究、福祉研究などを含み込んだスポーツの社会科学 = Social Sciences of Sport を意味しています。また、対象とする地域を広く世界に求め、「スポーツとグローバリゼーション」研究にもいち早く取り組んできました。



近年の卒業論文

- ・ スマホゲームの成功要因と弊害 ; E スポーツの定義—ファンダムの日常化と隠蔽
- ・ 本番で最大限の力を発揮する集団環境と個人心理
- ・ 日本のプロ野球におけるセ・パの実力格差と人気格差
- ・ e スポーツ後進国日本におけるプロライセンスの誕生
- ・ 女子マネージャー制度の社会的背景—私たちがマネージャーにしているものは何か
- ・ スタジアムから考える Jリーグスポーツを通じた地域振興に向けて
- ・ スポーツを開かれた文化にするには : スポーツ史的観点に着目して考察する
- ・ Jリーグ観客動員数増加への道 : 日本にサッカー文化を根付かせるために
- ・ なぜベジタリアニズムが欧米で急激に普及しているのか
- ・ 日本社会における社交ダンスの普及・発展
- ・ 日本プロ野球球団のファン獲得戦略について

● 社会政策

一橋大学における「社会政策」は、社会政策、医療政策、社会福祉政策、労働政策、都市政策、地域政策、コミュニティ政策の諸分野をカバーしています。そして、これらを横断する社会課題の克服を目的とした政策を築き上げるための知識と方法論を探究します。

「社会政策」は、人々の暮らし方が大きく変わった20世紀の社会現実を背景に形成されてきました。「社会政策」が焦点を当てる社会課題は、近代日本が工業化を進め、農村から都市に労働力と人口の大規模で急激な移動が起こり、伝統的な共同体の解体が進んだことなどに起因します。わが国経済の急成長の一方で、都市に集積した労働者家族の生活保障を伝統的な共同体が担うことは困難となりました。そこで国家による失業保険、医療保険、高齢年金などの制度・政策や企業経営による共同生活体形成(正規従業員の長期安定雇用や企業内福祉施策などいわゆる日本的経営など)、あるいは労働者の雇用保障と労働条件の維持向上を目指す労働組合の運動などが労働者家族の生活保障を担おうとしました。こうした社会状況の中で提出されてきた政策課題に対応するために、社会政策、社会保障、労働問題、労使関係論、人口問題などの学問分野が発展しました。

現在、日本社会の問題状況は大きく変わりつつあります。例えば、以下のような問題状況を挙げる事ができるでしょう。

- 少子高齢化など人口構造が変化し、わが国は人口減少社会の局面を迎えています。地方の過疎化と都会の人口集中が進む中で、人々のつながりを保ち、暮らしやすいコミュニティを維持していくことはできるのでしょうか。
- 経済のグローバル化の影響が社会のすみずみにおよび、企業経営は経営環境変化への対応に追われています。労働者の職場生活や労働条件、そして職業人生はどうなるのでしょうか。
- 制度・政策がどんなに整備されたとしても、「制度の狭間」に陥り、支援を受けられない人々が存在します。年金や生活保護をはじめとする社会保障制度は人々の生活を十分に支えられるのでしょうか。私たちはいかにして福祉社会への新たな展開を切り開けるのでしょうか。
- 人々のウェルビーイングの達成には、福祉サービスを提供する制度などとともに、物理的な環境も影響します。多様な人々が利用する都市や地域の空間は私たちの生活にどのように影響するのでしょうか。



近年の卒業論文

- ・地域の子どもの貧困対策における包括的支援体制の形成要因
- ・アルコール使用障害に対する早期介入・治療拡大
- ・なぜ基礎自治体による文化振興の条例・計画は必要なのか
- ・高齢者と介護職の関係の継続性と生活の質向上に関する考察
- ・現代での「ノブレス・オブリージュ」の可能性
- ・知的障害を持つ当事者たちの雇用の質の追求
- ・現代日本の大学中退者の就労—中退後の困難から就労に至るまで
- ・労働市場からの選択的離脱を望む若年高学歴女性の実態
- ・なぜ地域若者サポートステーションが整備されてきたのか—日本の若者政策の到達点と現状の課題
- ・福祉的就労に従事する知的障害者の一般就労への移行はなぜ進まないのか—デンマークとの比較を通して
- ・木造密集市街地における地区更新を大規模再開発に頼らざるを得ない要因—月島三丁目を事例として—

【開講科目】

共生社会研究分野では、「学ぶ」「健康を保つ」「世話をする」「働く」「人とつながる」「余暇を過ごす」などの、人々の日常生活における活動を対象とする科目を開講しています。具体的には、教育社会学、共生社会論、スポーツ社会学、社会政策・社会福祉などの科目があります。

関心のあるテーマに沿って、1年次から履修できる導入科目や全学共通教育科目から、2年次以降に履修する基礎科目、3・4年次に履修する発展科目やゼミナールへと、段階的に学修を積み上げていってください。

◎導入科目と全学共通教育科目

共生社会教育分野では、3つの導入科目を提供しています。いずれの科目も、身近な日常生活を学問の世界とつなぐための視点を提供するものです。実務家を招いた講義やフィールドワークを取り入れているものもあります。

教育と社会：人間の生涯にわたる成長・発達を援助する営みを組織化するにはどういうことかを社会との関連において捉え、現代日本社会と教育のあり方を読み解きます。

ジェンダー／セクシュアリティとライフデザイン：性の多様性をめぐる現代社会の状況を理解し、大学で学ぶジェンダーやセクシュアリティについての知見を生涯にわたる社会生活や職業生活にいかにか活かしていくか、社会環境にいかにかして働きかけるかを実践的に考えます。

まちづくりとコミュニティ・ビジネス：地域研究、社会教育、コミュニティ・ビジネス起業などについて実践的に学びます。NPO法人くたち富士見台人間環境キーステーションによる寄附講義です。

また、共生社会研究分野に所属する教員が開講する「社会研究入門ゼミナール」でも関連するテーマを扱います。ぜひ積極的に履修してください。さらに、スポーツ社会学に関連する科目が全学共通教育科目として多数開講されています。「現代社会とスポーツA・B・C」「スポーツと文化A・B」「地域社会とスポーツA・B」「ヒューマンセクソロジー」「スポーツと映像文化」「健康と福祉」「スポーツトレーニング論」「運動と体力の力学」「教養ゼミナール」などです。



学部ゼミナール内で作成したテイクアウトマップのひとつ



「ジェンダー／セクシュアリティとライフデザイン」の授業にゲスト講師として招聘した国会議員のみなさん

◎基礎科目

2年次からは、下記のような基礎科目が履修できます。それぞれの科目では、基礎的な理論や概念、問題の構造的把握や方法論などを学びます。3年次以降に本格的に取り組むテーマを選ぶうえで、基礎科目を幅広く履修しながら知識と思考を深めることはきわめて重要です。

教育の社会学：近代以降の社会における教育や学校の特有の性格とそれに内在する問題を、社会学的な視座から理解することを目指します。

教育の歴史：制度の内外で展開されてきた多様な教育の実例から、近代教育の矛盾と葛藤をはらんだ歴史を検討し、グローバル社会における人間形成の課題について考察します。

共生社会論：「共生社会」のあり方について、グローバルな人の移動、戦争、ジェンダーとセクシュアリティ、病気や傷つきなどの多様な観点から考えます。

スポーツ社会学の基礎：社会政策・開発学、社会学、歴史学などの理論やモデル、分析視角、手法などを用いて、スポーツとそれにまつわる社会現象を読み解きます。

社会政策総論：社会政策の基礎領域を「社会的排除／包摂」などの広い視野から展望する概説的科目です。

生活保障論：個人や家庭生活の安定を共同的に配慮しようという19世紀以降の政策が、現在どのような位置と方向を持っているかを明らかにします。

雇用関係総論：現代社会の雇用関係の実態を日本国内のイシューを中心に講義します。初学者が興味を持てるカレントトピックスを多く取り上げます。

都市・地域政策総論：工学・心理学・社会学などの視点に基づき、「人間－環境」における認知の仕組み、コミュニティなどの社会関係、および、計画手法について理解を深めます。

不動産の社会科学：“不動産”を切り口として、関連する社会科学の知識と、不動産の現場における最新の動向を情報提供します。三井不動産株式会社による寄附講義です。



タイのノンフォーマル教育機関で使用されている教科書



学部ゼミナールで、国立競技場の界隈をフィールドワーク

◎発展科目

3年次から履修できる発展科目では、さまざまなテーマについてより深く学ぶことができます。自分なりの問題意識を学術的な方法を用いて探究する楽しさを、ぜひ味わってください。

教育政策：教育政策の形成・実施過程をなす教育行政制度の原理について、歴史的・社会的背景をふまえるとともに、学校経営・統治における意思決定のあり方を検討します。

教育社会学特論：近年の教育社会的な研究が明らかにしてきた知見について学び、今日の教育をめぐる諸問題を社会的な視座から理解することを目指します。

比較・国際教育学：比較教育研究の理論と方法、国際教育学が提唱された背景を学び、グローバル・イシューの解決に向けて比較・国際教育学が果たしうる役割について検討します。

スポーツの歴史：スポーツの発展の様相を諸外国と日本、そして一橋大学における具体的な事例の検討を通して、歴史的にとらえます。

スポーツ文化論：スポーツを現代社会における文化の一つと捉え、どのようなレベルで、どのような問題をはらんでいるのかを歴史や社会構造との関係から読み解きます。

スポーツと開発：スポーツが様々な次元の「開発 development」に資するか否か、資するとすればどのようにしてかを、世界各地の事例に基づいて批判的に検討します。

スポーツ政策論：スポーツを取り巻く社会（政治、教育、福祉、地域生活、集団の組織論、地域社会におけるヴォランティアな住民の動き、国際的動向など）の動きをとらえながら、それぞれの特質を探ります。

社会政策特論：健康に関する政策学的な研究動向を踏まえて、健康に対する学術的なアプローチの可能性について多角的に論じます。

社会福祉：社会政策の中心的な位置を占めるようになってきている社会福祉について、制度・政策の機能とソーシャルワークを通じた実践との関係を中心に検討します。

雇用関係特論：現代社会の雇用関係について、労働力の国際移動、働き方の柔軟化など、現代的なイシューを取り上げて検討します。

都市・地域政策特論：都市政策および地域政策における研究力の向上を目的として、認識利得の大きいリサーチクエスチョンや方法論などにかんし解説・議論します。

3年次以降は、上記のような発展科目の履修に加えて「ゼミナール」が学修の中軸となります。他の学生や教員とのディスカッションを通じて、最先端の研究動向にも触れながら、自ら選んだ研究テーマを卒業論文として仕上げていきます。3年次にはグループでテーマを設定して共同研究をおこなうゼミもあります。



学部ゼミナール（3年）での議論の様子

・ 歴史社会文化研究分野 ・

歴史社会文化研究分野は、人文科学を探究する分野であり、多様なディシプリンによって構成されていますが、歴史学のグループ、哲学・社会思想史のグループ、そして、文芸・言語研究のグループの大きく3つに分けることができます。



朝鮮近現代史ゼミ：ソウル調査



哲学・倫理学ゼミ

歴史学への招待

1. 歴史学とはなにか

歴史学とは、人間の世界において過去に生じたこと、過去における人間の物質的・精神的諸活動の総体を究明しようとする学問と考えます。その固有の方法は、(1) 史料収集——それぞれの関心と主題に応じて、過去の痕跡である「史料」(歴史資料)を出来る限り大量に収集して、(2) 史料批判——過去を復元・認識するために、学問的に厳密な手続きによりながら史料を批判・分析し、(3) 歴史叙述——史料収集と史料批判から得られた知見を作品化することです。こうした歴史学の方法は、経済学、政治学、社会学、人類学、文学などの人文・社会科学研究の諸分野にも、また場合によっては自然科学にも取りいれられていますし、歴史学もまた他分野の最新の方法論を取りいれて発展してきた、それ自体が学際性のたいへんに強い学問分野と言えるでしょう。そのなかで歴史学の核心とも言える特徴は、ただ単に過去の事実に関心を寄せ、事実を明らかにすることにとどまらず、過去における人間の物質的・精神的諸活動の総体に内在している基本的な構造と発展の論理を究明しようとする、すなわち「全体」と「構造」に対する関心です。このように固有の方法を駆使して研究すること、歴史学全体としては体系を見出そうとしていることが、歴史学を単なる歴史好きから分かつゆえんなのです。

一橋大学は、日本の歴史学の発展に大きな役割を果たした歴史学者を多く生み出してきました。とくに、一国史的関心を越えた世界史的な視野と方法の開拓と、探求と関心の対象を常に社会の総体に向ける視点と方法の開拓のふたつの点で、一橋大学の歴史学は日本の歴史学に大きく貢献してきました。



ソウル・南山で歴史踏査：朝鮮王朝の都・漢城の都市構造について学びました。発掘された漢城都城の城壁（右）。

2. 歴史学を学ぶ方法

歴史学は以上のような学問ですので、系統的に学ぼうとする場合、とくに大学院進学に関心がある場合には、(1) 文献・史料の読解力、(2) 史料批判、(3) 史料の分析と総合、(4) 歴史叙述の方法について、それぞれ学問的な手続きを踏むこと、すなわち方法としての歴史学を習得することが必要です。

(1) については必要な語学力の修得が含まれますし、日本史でも「くずし字」など古文書の読解力を修得する必要があります。(2) では信頼できる史料とは何か、その史料を全体のなかでどのように位置づけたら良いのか、どのように使うことができるかなどを判断する学問的な手続きを習得する必要があります。これらの力をつけるために開講されているのが、史料講読や古文書(中世、近世)です。

(3)、(4) を学ぶ主たる場はゼミです。1年秋冬学期と2年で履修できる社会研究入門ゼミ(期間は2学期=半年)で、歴史学グループ所属教員のゼミを受講することは、その入門としての意味をもつでしょう。さらに学部3・4年ゼミでは、日本、アジア、ヨーロッパ、アメリカの各地域史、ジェンダー

史分野の歴史研究で必要とされる方法を総合的に学んでゆくことになります。

日本史、日本政治史、アジア史、ヨーロッパ史、アメリカ史の総論、そして日本史・思想史、アジア史、ヨーロッパ史、アメリカ史、ジェンダー史の特論は、それぞれ担当教員が個別の主題について開講する教室講義科目です。歴史学を系統的に学ぼうとする場合には、こうした歴史学関係の講義をできるだけ広く、その対象とする時代・地域の違いを問わず履修し、歴史および歴史学に関する基本的な知識を習得することが必要でしょう。



歴史学のゼミナールの様子：論文や史料を徹底的に読み込んでいきます

3. 歴史学の各研究領域の紹介

【日本史】

日本史は、主として日本列島をフィールドとして、そこに生起してきた歴史的事象を対象とします。対象とする時代は、日本列島が形成され人が住むようになった原始の時代から現代まで長期にわたりますが、社会学部に属する日本史の教員は、16世紀以降、時代区分でいえば「近世」以降を専攻しています。

社会学部に入学するみなさんは、高校時代に歴史系の科目が好き、あるいは得意だったという方が多い印象があります。それは、大学で日本史を学ぼうとしても大きなアドバンテージになるでしょう。ただ一方で、高校の教科書や授業で触れた日本史は、対象とする内容や範囲、対象にせまる視点や視角が、どうしてもかぎられます。もちろん、教科書以外にも多くの歴史書や歴史小説などを読んで、影響を受けてきたという方も、いらっしゃるでしょう。

大学では、みなさんがこれまでに培ってきた日本史についての知識や認識にとどまらない、みなさん自身が、知りたい、問いたい、考えたい歴史的事象に、みなさんなりの視角でせまることができるような、日本史をみる眼を養うことを目指します。社会学部の日本史には、歴史を生きたひとりひとりが何とむきあい、何を、どのように認識して行動してきたのかを問う思想史、主体的に記録を残したわけではかならずしもないが、たしかに歴史を生きたひとりひとりの歩みを問う民衆史、人びとが生きた現場である地域社会のありようとそこに生起した事象を問う地域史、民衆や地域の視点も視界に収めつつ政治を歴史的に問う政治史、歴史を生きた人びとの日常や生活世界、感覚や意識のありようを問う社会史など、さまざまなアプローチで歴史にせまる研究や教育をおこなう点に特徴があります。授業やゼミをとおして、みなさんなりの日本史の見方や問い方を身につけていただければとおもいます。

日本史に関わる講義科目には、1年次から履修できる導入科目の①社会研究入門ゼミ、2年次から履修できる基礎科目の②史料講読（日本）・③日本社会史総論・④日本政治史総論、3年次から履修できる発展科目の⑤日本社会史特論・⑥日本政治史特論があります。担当教員によって、科目の位置づけは若

千異なりますが、①入門ゼミで日本史研究のイメージをつかみ、研究の素材となる史料を読み解くスキルを②史料講読で身につけ、史料にもとづく歴史の見方の一端に③④総論や⑤⑥⑦特論で触れます。また、3・4年次にはゼミナールに所属し、自身が追究するテーマを定め、研究文献や史料を読み解き、成果の報告と議論をとおして研究を深めて、最終的に卒業論文をまとめます。

卒業論文タイトル一覧

(2021年度)

- ・日本における精神医学の医療フェーズへの展開―明治、大正期の3文脈に着目して―
- ・関東大震災と首都東京―帝都復興事業の遺産―
- ・大正・昭和初期における、検閲に対する「民衆」の諸相―出版業界を中心にして検討―
- ・近代日本における台湾・朝鮮イメージの比較―風刺漫画による検討―
- ・大日本武徳会のイデオロギー的機能と「明治武士道」に関する考察
―『武徳誌』を中心とした機関誌事業の分析から―
- ・1930年代後半から1945年の日本における銃後の人々の動機に関する研究
―なぜ彼らは銃後の活動に取り組んだのか―
- ・戦時期の日本における女性労務動員政策
―政策が直面した「障壁」と「葛藤」に注目して―
- ・第二次世界大戦期における障害者動員
―障害者種別ごとの分析と統合からみたその実態と特徴―
- ・旧国鉄篠山線に関する地域史の批判的検討―住民意識の観点から―
- ・アジア・太平洋戦争へ向かった日本と現在の中国―経済を中心に―
- ・近世軍記物の成立・性格からみる記述の違い―石垣原の戦い関連史料を題材に―
- ・播州葡萄園を通して見る前田正名の政策実現主体

【アジア史】

アジア史は、中国近世・近現代史、台湾近現代史、朝鮮近現代史を専攻とする教員で構成されており、これらの分野について本格的に学習することができます。東アジアの近現代史を中心としているのが、本学のアジア史の特徴です。

ゼミでは、論文や史料の講読に加え、フィールドワークに重点を置いている点に特徴があるといえるでしょう。中国・台湾・韓国に留学する学生も少なくありません。

履修にあたっては、アジア史関連の史料講読、総論、特論、社会文化論原典講読に加えて、日本史をはじめとした他地域の科目、ジェンダー史関連科目などを選択するとよいでしょう。

* 洪郁如ゼミ（台湾近現代史）

洪ゼミは台湾近現代史を対象としています。戦前日本の台湾統治を帝国史と台湾史双方の文脈や視点から考え、社会一般の「親日台湾」言説などを批判的に検証しています。また台湾の戦後史、中国との関係、台湾の政治と民主化、学生運動、先住民民族運動、フェミニズムおよびLGBT運動なども幅広く取り上げていきます。台湾での現地研修や日本国内での関連活動への参加も不定期に行っており、台湾人留学生、台湾への留学経験を持つ日本人学生、台湾研究をテーマとする大学院生らと交流する機会も多くあります。

卒業論文テーマ事例

- ・日本統治下台湾における鉄道の機能
- ・日本と台湾における昭和軍歌—戦争動員、共感、ノスタルジー
- ・戦前日本と台湾における野球の需要と展開の比較
- ・台湾日本語世代をめぐる二重の「日本人性」のパッケージ化—ドキュメンタリー映画『台湾人生』『台湾アイデンティティ』を中心に
- ・東京商科大学の台湾人学生に関する調査と考察



台湾研修：(左)台湾領有[1895年]の激戦地を見学—彰化八卦山大仏、(中)複雑な気持ち：一国立台湾歴史博物館、(右)西海岸の漁村から台湾海峡を眺望—彰化県芳苑郷

*佐藤仁史ゼミ（中国近世・近現代史）

私のゼミでは、①中国近世・近代地域社会史、②「旧満洲国」に住んだ人々の戦後日本史を中心としてアジア史を考えています。時間軸においても、地理的範囲においても相当な幅がありますが、思考に際して重視しているのは生きられた地域における基層の人々の視点です。換言すると、ロー・アングルからボトムアップにみる歴史学的思考を目指しています。①については、中国の地域社会にあった人々がどのように近代を経験したのかを、②については、戦後日本における「満洲国」からの引揚者のコミュニティやそこにおける歴史語りをそれぞれ考えています。

ゼミでは、上記の検討課題に接近する方法としてオーラルヒストリー調査を中心とするフィールドワークも行っており、「語り」のアーカイブ化や様々なエゴ・ドキュメントの翻刻も行ってきました。その成果は佐藤仁史ほか編著『崩壊と復興の時代：戦後満洲日本人日記集』（東方書店、2022年）や電子ジャーナル『満洲の記憶』として公表しています。

卒業論文のテーマ例

平和共存路線初期中国の対日情勢認識と外交政策

敗戦直後長春における日本人居留民会

日華断交以降の在日台湾華僑とその組織

1920年代広東省における孫文・陳炯明抗争の意味するもの：商人層の視点から

中華民国期上海の女性家事使用人と主婦

*加藤圭木ゼミ（朝鮮近現代史）

加藤ゼミは朝鮮近現代史を対象としていますが、その中でも朝鮮植民地支配の歴史、在日朝鮮人史、日本軍「慰安婦」問題などに重点をおいています。加えて、現代韓国社会、特にフェミニズムの動向について学ぶことも少なくありません。ゼミでは、文献を通じての学習に加えて、歴史の現場を歩くことを大切に、毎年韓国や日本国内で踏査を実施しています。韓国に留学する学生も多く、韓国人学生や在日朝鮮人学生との交流も盛んです。さらに、加藤ゼミは『「日韓」のモヤモヤと大学生のわたし』（大

月書店、2021年)を刊行し、市民とともに植民地支配の問題を考える方法を模索しています。

卒業論文のテーマ例

植民地朝鮮における新女性の主体性形成——金マリアを中心に (2021年度)

ボクシング漫画『あしたのジョー』から見る梶原一騎の朝鮮観 (2021年度)

在日朝鮮人支援を目的とした市民運動とその問題意識～1980年代調布市の「ムルレの会」と「市民の会」を参考に～ (2021年度)

現代日本と渋沢栄一——大河ドラマ『青天を衝け』を通して—— (2021年度)

日本の朝鮮西北部植民地化過程——鎮南浦における軍事占領・「開発」・性搾取 (1897～1901) (2021年度)

景福宮の毀損と復元から見る日本植民地歴史の清算——朝鮮総督府庁舎を中心に—— (2021年度)



加藤ゼミ 韓国での踏査



加藤ゼミ ソウルで開催された国際シンポジウムで報告するゼミ生

【ヨーロッパ史】

ヨーロッパ史は、高等学校の世界史でも大きく扱われる地域史のひとつでもあるため、なにを対象に研究しているか比較的イメージしやすいのではないかと思います。古代ギリシア・ローマから中世ヨーロッパ、宗教改革からフランス革命を経て近代世界の形成といったように、世界史の流れのなかにヨーロッパ史はいわば分ちがたく結びつけられています。そうした「世界史の流れ」とでもいえるような知識は、社会学部で学ぶ社会科学や人文科学のさまざまなテーマや方法の共通の基礎でもあります。そうであるがゆえに、あらためてヨーロッパ史を大学で学ぶ、学び直す、さらには研究することの意義・意味をイメージできない人も多いのではないかと思います。ただ、大学に進学してヨーロッパ史の授業(他の歴史の授業も)を履修すると、おそらく、そこで扱われる「歴史」が、大学受験まで抱いていた歴史とは大きくイメージが違うことに驚くことになるでしょう。もちろん、ヨーロッパの各国・地域や各時代についてのさらに詳しい知識を得るということもその違いのひとつですが、より根本的な違いは、問いのあり方にあります。さらに、その問いをより具体化するためにどういった資料・史料を見ていけばいいのか、この問いはそもそも問いとして適切なのか、などといった問題もそれに連なっていきます。問いから始まる歴史の見方は、それまでの歴史・ヨーロッパ史の知識をしっかりと活かしながらも、歴史のイメージをがらっと変えてしまうでしょう。

社会学部のヨーロッパ史の科目・ゼミは、近世・近代史研究を専門とする教員が担当していますが、後期ゼミの学生は、時代的には中世から現代まで、地域的にはイギリスからロシアまで幅広く、それぞ

れ学生の「問い」に導かれたテーマで卒業論文研究に取り組んでいます。それだけ広い時代と地域にまたがるわけですから、それらの問いに関わる文献や歴史資料、そしてその言語は多岐にわたります。たとえば、中世のボスニアに関する問いを立てたとすれば、ボスニアで中世に書かれた古代スラヴ語の資料を読むことができれば、もしかしたら確かな「解答」が得られるかもしれません。ただ、それは一朝一夕にできるようになりはしません。その前に、たとえば日本語で中世ボスニア・中世東欧についてどんな研究があるのか、英語ではどうか、翻訳されている史料はどんなものがあるのかというように、段階を踏んで問いに向き合っていくことになります。ヨーロッパ史の授業・ゼミでは、学生たちが主体的に立てた問いにどのように肉薄していくかを習得していきます。

【アメリカ史】

日本国内でアメリカを対象とする学問は、「アメリカ研究」という地域研究の枠組みで教育・研究が行われているところが多いのですが、一橋大学のアメリカ史研究は、歴史学のディシプリンでアメリカを学べる、日本でも数少ない教育・研究の場です。社会の底辺から歴史的事象を問い直す“from the bottom up”の社会史の眼差しを分析視角の柱にして、黒人史や移民史、ジェンダー史、国際関係史の分野で多くの研究者を輩出してきました。

20世紀は「アメリカの世紀」と呼ばれましたが、21世紀になってもアメリカの政治的・経済的・軍事的・文化的プレゼンスは大きいので、アメリカの歴史を学ぶことは国際政治や国際経済を学ぶことにもつながります。

また、日本にとってもアメリカは特別の存在です。19世紀中葉の黒船来航から21世紀の現在に至るまで、日本人が特別の眼差しを向けてきた国、それがアメリカ合衆国です。アジア・太平洋戦争の敗戦を経て、「世界で最も重要な二国間関係」とまで語られるようになった戦後の日米関係のもとで、私たちは戦前以上に、アメリカの映画や音楽、文化に親しむようになりました。

しかし、だからといって、日本人がアメリカの歴史をしっかりと理解しているとはいえません。「自由の国」アメリカでなぜ銃犯罪がこれほど起こり、人種・エスニック集団間の暴力が頻繁に起こるのか。なぜ黒人大統領オバマのあとに、トランプ大統領が誕生し、社会の分断が進むことになったのか。みなさんと同じZ世代の若者はどうして、「黒人の命は大切」というブラック・ライブズ・マター運動を牽引したのでしょうか。みなさんと一緒に、アメリカの「いま」を問いながら、歴史を学びたいと思います。

アメリカ史の教員は、①アメリカ移民史、人種・ジェンダー・エスニシティ研究、②人道主義の国際史、グローバルヒストリーを専門とする2名の教員が担当します。アメリカ史総論やアメリカ史特論、史料講読などの授業を通じて、アメリカ史の方法や課題を習得してください。

最近の卒業論文テーマ

- ・アメリカの集合的記憶—原爆投下に対する歴史認識の形成過程から
- ・Beyond “Model Minority” : Analysis of Method for Reframing Asian American Identity
- ・アメリカ人の熱狂的政治参加の背景—公立学校における愛国教育と市民権教育への着目
- ・SNSは「アメリカの民主主義」を変容させるのか
- ・現代アメリカのポピュリズム—トランプ当選の背景—

ジェンダー史

「子育てには、男性より女性の方が向いている。なぜなら女性には母性があるから」。このような考え方は普遍的なものでしょうか。あるいは「女性は男性よりも感情的である」という命題はどうでしょう。

そもそも「性別カテゴリーは男女の二つである」、「男女には生まれつき差異が存在している」といった考え方はどうなのでしょう。いずれの考え方も普遍的なものではないことは、すでにジェンダー史研究の成果によって明らかにされています。ジェンダー史の魅力は、現代社会において自明視されているジェンダーのあり方を、豊富な事例によって相対化できるところにあります。

またジェンダー史研究は、一見ジェンダーとは無関係に見える歴史的事象にも鋭く切り込んできました。たとえば、アメリカの奴隷制とジェンダーには、どのような関係があったのでしょうか。あるいは、台湾の日本時代における「台湾人」の経験は、階層やジェンダーによって、どのように異なっていたのでしょうか。ジェンダーの視点を持ち込むことによって、それまで描かれていた男性中心の歴史像を塗り替えるとともに、人種や階層、民族とジェンダーの交差性を論じる。これもジェンダー史研究の大きな魅力です。

ジェンダー史を学ぶためには、各史総論を受講して歴史学に共通した考え方を理解するとともに、「ジェンダーと社会」などジェンダー論の基礎科目を受講し、ジェンダー研究における課題や方法論を習得してください。その上で、発展科目である「ジェンダー史特論」を受講することを勧めます。

なお、ジェンダー史は多様な地域や時代を対象とする研究者によって、その方法論や分析視角が日々更新されています。大学院に進学してジェンダー史を専攻することを希望するのであれば、英語で論文を読みこなせるだけの語学力が必要となります。「Gender and Japanese Society」などの英語科目にも挑戦し、進学のための準備もすすめてください。

哲学・社会思想史への招待

・哲学・社会思想史とはどのようなグループか？

哲学・社会思想史グループには、我々は世界を正しく認識できるのか、どう振る舞うのが倫理的に正しいのか、そもそも「正しい」とはどういうことか、行為と行動の違いは何か、人間に自由はあるのか、芸術作品とは何か、といった原理的な問題に取り組む哲学（・倫理学）と、社会をめぐる原理的な問題だけでなく、より具体的な社会問題も含め、広く社会を対象とした多様な思想活動を、歴史的な文脈との関係を重視しながら分析する社会思想史が含まれます。その意味で社会思想史は歴史研究とも密接な関わりをもっています。

哲学（・倫理学）においては、上で述べたような原理的な哲学的問題に取り組んでいくこととなりますが、その際に重要になるのは《過去の哲学者の議論を学ぶこと》というよりも《自分でも哲学的に思索してみること》です。これはもちろん、好き勝手な感想を書き散らしてよいということではありません。何かを主張するためにはそれを根拠づける論証が必要ですし、論証の説得性を評価する際にはこれまでの先行研究を参照することが必要になります（その意味では過去の哲学者の議論を学ぶことも重要です、そうする中で自分が取り組んでいる哲学的問題をよりよく理解できることもあるでしょう）。ただ、哲学を学ぶということは、誰が何を言ったかを学ぶというよりも、それを踏まえつつ自ら哲学的に議論できるようになることだ、と言いたいのです。どんな哲学（・倫理学）的問題に取り組むかは皆さんの自由です。授業やゼミの中で、あるいは図書館や書店においてある哲学の入門書を手にとることで、自分の関心のある問題を見つけていくことができると思います。

社会思想史においては過去の思想家が残したテキストを精緻に読み解くことはもちろんですが、先述したように、そのテキストを取り巻く歴史的背景を理解することも重視します。ここで歴史的背景というのは、政治や経済、文化といった具体的な社会状況を指す場合もありますし、当時の思想状況を意味することもあります。思想は、先行する、あるいは同時代の思想との対話や対決、利用（時に誤用）やその克服によって構築されるものでもあり、思想家自身が直面する社会問題の解決を目指して作り上げるものでもあります。さらに、こうした思想的営為は、後世から「思想家」と呼ばれる人たちだけが行っていたわけではありませんし、古典とされる作品だけが研究に値するわけでもないのです。どういった思想、どのテキストを学ぶかは皆さんの関心次第です。自分の関心に沿った授業を選ぶことはもちろん大切ですが、授業を履修することでそれまで曖昧だった問題関心が明確になることもあります。

わたしたちは学部1年生から履修可能な科目に積極的にかかわり、学生の皆さんと1年次から接し、交流する機会を多くもっています。皆さんにはそうした機会を通じて哲学・社会思想史が扱う課題やテーマに触れ、わたしたちの研究に関心を向けるとともに、皆さん自身が何を学びたいのかを明確にしていって欲しいと期待しています。

一方、学部における教育、とりわけゼミナールにおいては、より専門的な研究教育を進めるための基礎として、原典にじっくりと取り組む姿勢を重視しています。ゼミ以外にも大学院との共修科目である「原典講読」授業があり、少人数で語学力の向上とテキストの深い理解を目指した精読を行っています。そこでは教員だけでなく、ときには大学院生とも身近に接しながら、テキストを精緻に読むという訓練を通じて自分の関心を深めることが期待されています。もちろん、多くの学生が履修する形式の学部専門講義も開講されており、わたしたちの研究成果を皆さんの知的関心に結びつける努力がされています。



哲学・倫理学ゼミでの研究報告

・開講科目について

哲学・社会思想史グループで開講されている科目は次の通りです。授業内容は開講年度ごとにかわるので、詳細についてはシラバスを参照してください。なお、共修科目は大学院生も履修できるものですが、学部生にとって決してハードルが高い授業ではありませんので、積極的に履修してください。少人数講義の場合は大学院生と接触する機会もあり、刺激を受ける場合もあるでしょう。

- I 学部導入科目：哲学概論、倫理学概論
- II 学部基礎科目：社会哲学、社会倫理学、社会思想
- III 学部・大学院共修科目：哲学特論、倫理学特論、社会思想史特論、社会思想史原典講読

・卒論の例

(2025年度 井頭ゼミ)

- 「道徳的に不正な差別とは何か」という問いに哲学はどう答えるべきなのか——差別の哲学の実践的意義を検討する——

(2024年度 井頭ゼミ)

- 固有名詞の指示理論

(2023年度 井頭ゼミ)

- 予防原則の定義の見直し
- J・S・ミルの他者危害原則によって人を被写体としたスナップ写真の営みにおける諸行為は規制されるか
- 了解概念の分析と方法論的多元主義の帰趨
- 総称文の発話の責任は何に由来するのか
- 倫理理論と肉食主義の理解

(2022年度 井頭ゼミ)

- 素朴心理学と命題的態度——消去主義への反論
- 隠喩はどうしてわかるのか——隠喩伝達の非認知主義
- 音楽の情動表出理論の批判的検討——第三世代の認知科学からの改訂案
- 各々の植物に対する配慮も必要なのではないか——ストレスを基準として生物に配慮をする
- 「お前が言うな。」とは、どういうことなのか——非難に対するキャンセル要件の定義と偽善的非難の説明
- “涙活”における涙は共感によるものか

(2021年度 井頭ゼミ)

- 韓国社会の自殺に対する倫理的な考察
- 自然種としての精神障害のあり方
- 実践的推論に基づく行為理解への比較検討
- 〈説明ギャップ〉の存在は物理主義にとって問題があるといえるか
- 読書経験における「分からない」状態はどのように生じるか
- ヘイトスピーチ論争に基づく人種的マイクロアグレッションの研究意義

(2024年度 吉沢ゼミ)

- 死者AIについての倫理的検討における使用概念と論点の整理
- 自由と道徳的責任の関係性を再考する
- 伴侶動物の倫理的な扱い——犬を例として
- ソーシャルロボットと人との関係の倫理的検討
- 動物倫理における理論と実践のギャップ
- 妊娠中絶におけるマーキスの〈我々と同じ将來說〉の検討
- ジョセフ・ヒースのメタ倫理学

(2023年度 吉沢ゼミ)

- 動物園の正当性に関する倫理的検討
- クライオニクスの倫理——患者の自己決定の妥当性
- 主体と世界との対立の哲学としての『少女革命ウテナ』——「王子様」になるウテナと「王子様」を求めないアンシー
- 真の利他的行為は存在しうるのか

・ゼミの活動紹介

井頭ゼミ

3年生と4年生の合同ゼミの形で、テキスト講読と個人研究報告の2つを軸にして進めていきます。

テキスト講読については、過去の哲学者の見解を学ぶというよりは、哲学的問題に自分で取り組むことを重視しているため、基本的には日本語のテキストを用いて講読を行なっています（ただし大学院への進学を考えている人は担当教員と相談しつつ各自で英語文献を読み進めるようにしてください）。扱うテキストは科学哲学・形而上学・言語哲学・心の哲学・認識論・倫理学・美学など多様な分野から選定されていますが、基本的には「分析哲学」と呼ばれる領域からの文献を扱います。シラバスにこれまでの講読テキストが記載されていますので、参考にしてください。

個人研究報告は、卒論執筆に向けたそれぞれの研究進捗を報告し、関連研究について教えてもらったり、コメントをもらって原稿を改善したりする重要な機会です。3年生のうちは、それぞれが関心を持った分野について自分で文献を読み進めていき（読む文献については担当教員に相談することが可能です）、取り組むべき問題を見つけた上で少しずつ自分なりに考えを深めていくことになります。4年生は、卒論原稿の執筆を進めて自分の主張と論証を展開し、それをゼミ内で共有しつつディスカッションしていくことになります。

吉沢ゼミ

ゼミで行なうことは、大きく分けると、文献講読と個人発表の2つです。

文献講読は、主に英語圏の倫理学のなかで論じられているテーマから、履修者と相談のうえ、できるだけ共通に関心をもてるテーマの本を選びます。基本的には、日本語で書かれた単著や、英語文献の邦

訳書をテキストに用います。これまでは、幸福や人生の意味といった価値をめぐる議論や、様々な具体的なテーマを論じる応用倫理学のテキストが候補に挙がってきました。テーマの候補を予め限定はしていませんが、英語圏の「分析哲学」と呼ばれる領域の倫理学の（あるいは関連するより広い哲学の）文献のなかから選びます。

個人発表は、卒業論文の執筆をゴールに定めて進めます。3年生のうちは、自分が本当に取り組みたい問いが何かを探しながら、暫定的なテーマを決めて、ゼミのテキストとは別に、関連する文献を各自で読み進めることになります。ゼミのなかで数回の進捗報告をすることで、他の参加者からも意見をもらいながら、問いと関心を明確にしていきます。（大学院進学を考えている場合は、より深くテーマに取り組むことを見据えて、英語文献を読み進める必要も出てきます。）4年生は、卒業論文の執筆を実際に進めつつ、進捗報告でのディスカッションを踏まえて、自分の論証を練って行って、最終的にひとまとまりの論文を仕上げます。

柏崎ゼミ

人間社会がいかなる条件で成り立っているのかについて徹底的に考え抜いた社会思想の古典を、日本語訳で読みます。文庫本でも読める有名なテキスト（ホブズ、ロック、モンテスキュー、ルソー、カント、マルクス、等々）を扱うので、身構える必要はありません。さらに、理論・学説を読み解くだけでなく、思想の背景をなす歴史についてのサブテキストも参照します。卒業論文については、3年生は冬学期の終わりに卒論の構想を発表し、4年生は卒論執筆のための中間報告をおこないます。

このゼミの目標は、「読む」とは何か、それは単なる情報収集（自分が気を引かれる断片を拾い集めること）とはどう違うのかを、体験学習することです。たとえば険しい山に挑む登山家が、どの道を、どんな手段で登るかを常に考えながら進むように、思想家もまた独自の方法を組み立てつつ、道なき道を一步一步、頂上まで昇りつめます。哲学・思想のテキストとは、そのような「方法的思考」のドキュメントなのであり、それを読むとは、読者自身が「方法的思考」を働かせてみることなのです。習うより慣れる、未経験者大歓迎。

文芸・言語研究への招待

文芸・言語研究はどんな学問領域か

文芸・言語研究グループが担当する科目は、人間の豊かな想像力が生み出した多彩な言語芸術や言語文化を対象とします。ここには、こうした言語活動の基盤となっている地域や民族ごとのきわめて多様な言語の構造や機能に取り組む科目も含まれています。また各スタッフは、それぞれの学問を追究するうえでとくに深くかかわる特定の地域・言語圏をもっています。現在、このグループを構成している2名のスタッフは、おのおのイギリスを中心とした英語圏、イベロ＝ロマンス諸語（スペイン語、ポルトガル語等）使用地域の専門です。

文芸研究は、おそらくみなさんが文学と聞いて一般にイメージする文学作品（テキスト）の精読にとどまらず、学問領域を横断するさまざまなアプローチで、テキストを成立させた文脈（コンテキスト）を探究する学問です。目下のところ、20世紀後半に出揃った感のある諸方法を、総合的に組み合わせて、検証し直す作業が続いています。すなわち、1950年代後半からのフランスでの構造主義の隆盛とロシア・フォルマリズムの(再)発見の影響のもと、1960～70年代に花開いた新批評(ヌーヴェル・クリティック)の多様なテキスト分析、テキスト分析の成果とテキスト理論を受け継ぎつつ、1970年代後半～80年代にさまざまな理論化と実践が試みられた生成研究、資料の発見・公開が進んだことで、「作家とその時代」に新たな光をあてようとする文芸社会学の1990年代以降の復権(更新)のいずれをも無視することは

もはやできないという意識のなかで、研究者は自らの軸足を模索しているという状況、と言えましょう。

文芸研究のスタッフは、ときに文化の粋とも見なされる文学について、その鑑賞が学問領域として制度化される過程と学的制度の外側で営まれる実践についても考察します。映像などの視覚表象や、従来は文学と見なされなかったようなテキストも対象としながら、学的方法、学問領域とは何かという問題にも踏み込みます。これにより、社会の成員や社会を構成する集団がどのように文化的価値を生み出し、また文化的規範によっていかに方向づけをされるかを明らかにしようとしています。

文芸・言語研究グループでは、ことばを軸に社会の諸相を解明する方法論も視野に入れていきます。言語学の成果を参照しつつ、社会とことばの関わりを多様な手法で分析することを目指します。音声学、音韻論、語用論、対照言語学など、多岐にわたる分野を扱います。また、フィールドワークの進め方、言語情報の分析方法等について、最新の知見をもとに最適化を期します。

所属するスタッフは、グローバリズムが進む中で、人の移動にともなう言語現象がどのような様態をなすか、その動態にとりわけ強い関心を向けています。こうしたテーマを追いかけるには、例えば、イベロ・ロマンス諸語で考えても、母語話者が多く移民する西欧や北米にも、以前、植民地支配をしていた関係でこれらのことばや影響を受けたことばを用いる住民が住むフィリピンや南米・アフリカにも、さらに、富を求めて南欧にやって来る人々の故郷である中国やマダガスカル諸国にも目を向ける必要があります。ますます複雑に、ラジカルに展開することばをめぐる現象に迫り、その実像に接近することを企図しています。

卒業論文の例

シャーロック・ホームズにおける外国人女性犯罪者の制裁と限界

The Possibility and Limitation of Rebellion in *Nineteen Eighty-Four*

マーティン・エイミス『マネー』における消費社会・男性・ポルノグラフィ

カズオ・イシグロ『忘れられた巨人』を流血の物語として読む——「流血」への抵抗——

Queering Asia: Queer Literature and Queer Theory in East-Asia: A Comparative Analysis of Pai Hsien-yung's *Crystal Boys* and Mishima Yukio's *Forbidden Colours*

履修ガイド

例えば、言語研究の分野を学究しようとする場合、次のような履修計画を立てるとよいでしょう。1年次には、当該分野担当教員が担当する科目である「社会研究入門ゼミナール」(学部導入科目)において、この分野ではどんな課題や論点があるのか、全体観を把握することができます。2年次以降には、科目「音声学」(学部基礎科目)を受講し、さらに理解を進めるとともに、この科目で重視しているアクティブラーニングの手法を通じて、フィールドワークをはじめとする調査の方法論を身につけることができます。

さらに、3年次以降には学部ゼミを受講し、卒業論文執筆に向け、個々の学生が持つ問題意識を持つ対象に対して、現象を引き起こす構造を理解し、明晰な分析に至らしめる方法を、教員、ともに考究するゼミ生のアドバイスに耳を傾けつつ、究明していきます。その中で、とりわけこの分野では、フィロロジ——文献をはじめとする「情報」と対面し、そして対話するよう克明さ、緻密さをもって探索すること——の重要性について意識しながら、学究を進めることとなります。

ゼミの活動紹介

英語圏文芸思想ゼミ (井川ゼミ)

3・4年合同でおこないます。ゼミ生の問題関心を確認するため、3年次の最初に2千字程度のレポートを提出してもらい、それに応じて、ゼミ生全員が関心を持ってそうな文献(英語で書かれた文学と批評

理論のテキストの両方)を、相談のうえ決定します。輪読をおこないながら、社会における文学テキストの機能、文学テキストを成立させる社会的コンテクストについて討議します。3年次の最後のゼミまでに卒業論文のテーマを絞り、先行研究の入手と整理を始め、4年次の夏休み明けには章立ての構想を練り上げ、執筆に取りかかれるようにします。4年次は、ゼミで文献の輪読を続けながら、数回、卒業論文の進捗報告をおこないます。卒業論文については定期的に個別指導もおこないます。

言語社会学ゼミ (寺尾ゼミ)

このゼミには、継承があやぶまれる言語を次代につなげる方法論を探索する、といった言語社会学の中心的な課題のひとつを検討しているゼミ生のほか、広く、知識社会学、情報社会学、言語心理学的観点から問題意識を向けている事柄を究明しようとする学生が集っています。具体的には、当代の学生が多用する表現から見る現代におけるコミュニケーションの諸相や、ITやAIと人間とのコミュニケーションとの融合の深化とそこに生まれるゆがみや齟齬などに向かい合い、現状を分析し、人間・人間社会と知識、情報との付き合い方の今後を展望しようと格闘しています。



言語社会学ゼミで、ゲストを招いてジャマイカのクレオール「パトワ」についてうかがっているところ

・ 超域社会研究分野 ・

「超域社会研究分野」という科目群は、主として社会心理学、社会／文化人類学、政治学、環境と社会から構成され、環境・社会・政治・人間行動を人文・社会・自然科学横断的に探究していくユニットです。このユニットには、社会心理学、社会／文化人類学、政治学、社会地理学、あるいは理科の研究室に所属する教員がいて、学生の教育と指導にあたります。研究のテーマもアプローチも多彩ですが、人間行動のダイナミクスを明らかにするとともに、社会の多様な問題に対して領域横断的、地域横断的に取り組むことを目指しています。

●社会心理学

人間は日常生活の中で互いに影響しあいながら生きています。そのような人と人との相互作用のあり方を研究するのが社会心理学です。一橋大学では「社会心理学Ⅰ（社会的分野）」「社会心理学Ⅱ（心理的分野）」「マスコミュニケーション基礎論」の3つを社会心理学関連の基礎科目としておいています。

「社会心理学Ⅰ（社会的分野）」では、私たちが日々の生活のなかで他の人々と様々な関係のもとに様々な形で営んでいるやりとり―日常生活実践―の実際とその帰結に焦点を合わせます。「社会心理学Ⅱ（心理的分野）」は主として個人の心理的過程に注目し、他者からあるいは人が生み出している社会的・文化的状況から受ける影響について検討をしていきます。「マスコミュニケーション基礎論」では私たちの日常生活にとって欠かせないものとなっているマスメディアについてその仕組みや影響を探っていきます。これらの内容をより深く学んでいくために、「Social Psychological Perspectives on Health」、「Cultural Psychology」が発展科目として用意されています。次ページの履修モデルには、社会心理学の研究を進めていく上で必要となる方法論を身につけるための科目もあげてあります。これらに加えて、社会心理学分野の教員が担当する「社会研究入門ゼミ」（1、2年生対象）を履修することで社会心理学の専門的知識をより深めていって下さい。さらに、3年生から4年生にかけて、社会心理学分野の各教員が開講する「学部後期ゼミナール」を通じて、それぞれのテーマについて掘り下げつつ、調査、実験、内容分析、フィールドワークなどの方法を学びながら、卒業論文研究を進めていきます。

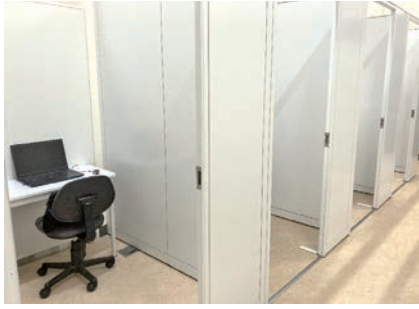


写真1：
集団個別実験室



写真2：
生理実験室

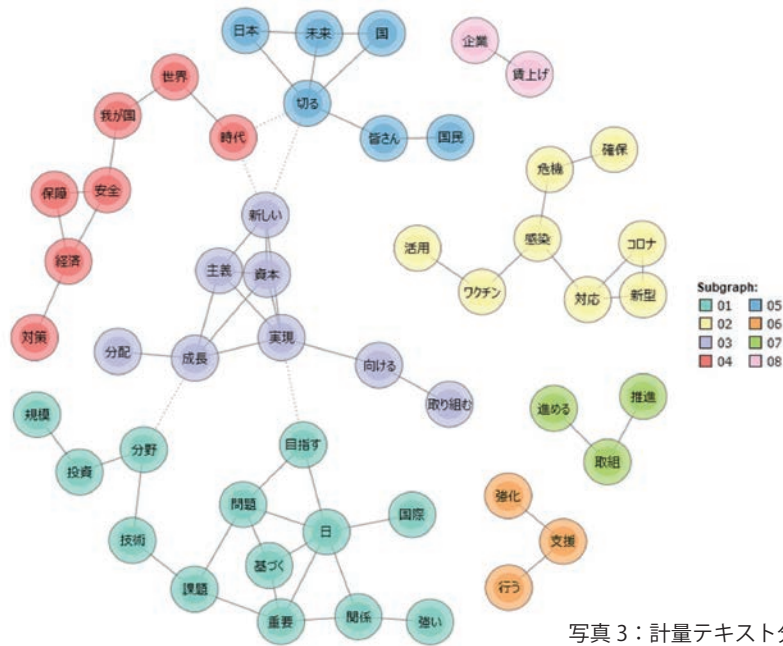


写真3：計量テキスト分析における共起ネットワーク図

履修モデル（2025年度非開講の科目も含む）

	科目名（対象学生）
学部導入科目	心理学（全学部1・2・3・4年）
学部基礎科目	社会心理学Ⅰ（社会的分野）（全学部2・3・4年） 社会心理学Ⅱ（心理的分野）（全学部2・3・4年） マスコミュニケーション基礎論（全学部2・3・4年）
学部発展科目	ジャーナリズム実践論（全学部3・4年と大学院生） Social Psychological Perspectives on Health（全学部3・4年と大学院生） Cultural Psychology（全学部3・4年と大学院生） Biological Psychology（全学部3・4年と大学院生） Cognitive Neuroscience（全学部3・4年と大学院生） Cultural Neuroscience（全学部3・4年と大学院生）
方法に関わる科目	量的データ解析法Ⅰ・Ⅱ（全学部2・3・4年／3・4年） 社会調査論（全学部2・3・4年） 社会調査法Ⅰ・Ⅱ（全学部2・3・4年） Data Analysis and Presentation（全学部3・4年と大学院生）

●社会人類学

人類学を特色づけるのは、具体の研究対象への強いこだわりです。人類学はどんな対象でも理論でも受け入れます。たとえば、対象は人間でなくモノ、現在でなく過去にまつわる事象でも結構ですし、理論が社会学や哲学や科学技術論にかぎりなく近くても問題ありません。寛容を旨とする人類学が絶対に拒むこと——それは対象の細部や周辺や背景へのこだわりを捨て去ることで。人類学では他の科学のように、事例が理論を立証する道具になるのではなく、むしろ理論が事例を演出します。分析者が高みから事例の真相をあばくのではなく、事例と水平に並んで、事例にシンクロナイズするように思考を展開します。人類学がフィールドワークを重視するのもそのためです。

こんな特色に何か意義があるのでしょうか？ 人類学は決して細部にこだわるだけの学問ではありません。この学問はどんな民主主義よりもラディカルに既成の序列を疑い、序列化からの脱却に現実を批判し再構築する可能性を賭けています。事例と理論をめぐる人類学の姿勢は、そうした既成の序列に対する何重もの挑戦の表明です。分析対象と分析者、事例と法則、人間と非人間、細部と全体、問題と解決といった二項の間の序列が、ここには含まれています。だから人類学の実践では、分析者が対象によって自分を分析したり、人間が非人間の同類として人間になり直したり、全体が細部によって別の相貌をあらわしたり、問題が矮小な解決を圧倒してあたらしい地平を切り拓いたりすることが起きるのです。このようなラディカルな姿勢が一橋大学の社会人類学の特徴です。



(上) インドネシアの楽器
(右上) ナイロビ・リバーロード
(右下) ロンドンのカーニバル



(左) ベトナムのネットカフェ



(右) 社会人類学共同研究

【社会人類学に関連する授業】

○学部導入科目

「人類学概論」(全学部1～4年): 人類学の実践と理論の基礎を総合的に学ぶ

○学部基礎科目

「社会人類学総論」(全学部2・3・4年): 学説史を中心に、人類学の理論を学ぶ

○学部発展科目

「現代人類学特論」(全学部2・3・4年): 特定のテーマに焦点を当て、人類学的探求の方法を学ぶ

「エスノグラフィ」(全学部3・4年): 事例と理論が闘ぎあう民族誌の読み方・書き方、そして面白さを学ぶ

「周辺状況の諸問題」(全学部3・4年と大学院生): 周辺化という概念の問題を含め、再検討する

履修モデル

人類学を体系的に学ぶ	関連する領域から知的刺激を得る
【学部導入科目】 人類学概論	【全学共通教育科目】 社会言語論 言語と社会 現代思想 音楽論(東洋)
【学部基礎科目】 社会人類学総論	【学部基礎科目】 ジェンダーと社会 人文地理学総論 地域研究
【学部発展科目】 現代人類学特論 エスノグラフィ 周辺状況の諸問題	【学部発展科目】 宗教社会学 国際社会開発論

履修上のアドバイス

学部導入科目「人類学概論」は一年次履修が望ましい。「社会人類学総論」、「現代人類学特論」、「エスノグラフィ」、「周辺状況の諸問題」はそれぞれ異なる開講年次には異なる講師が担当するので、同科目名の講義を繰り返し履修してもその都度異なる内容の講義を受けることができ、問題の多様な広がりや深さを学ぶことができるようになっている。また上記のような人類学と関連する諸領域から様々な知的刺激を得ることで、問いをさらに鍛えることを勧める

●政治学

1. 社会学部の中の『政治学』

一橋大学は、政治学が社会学部のなかに置かれている大変珍しい大学です。他大学では政治学に含まれる国際関係論、外交史、行政学などは法学部で開講されています。これは、戦前「キャプテン・オブ・インダストリー」を輩出した東京商科大学が、戦後に一橋大学と名を変え「社会科学の総合大学」として再発足するにあたって、商学部・経済学部とともにいったん法学・社会学部がつけられ、そこから法学部と社会学部が分離した、という一橋大学の沿革と関連しています。

日本の政治学は、戦前ドイツの大学システムと国法学・国家学の影響を強く受けて、法学部の憲法・行政法から分かれて片隅におかれ、天皇制国家の官僚養成のための学問として生まれ育ちました。戦後の日本国憲法のもとで、丸山真男らにより「科学としての政治学」が提唱され、再建された後も、国立大学を中心に政治学を法学部の一部とする伝統が残りました。

ところが、もともと「官学」でありながら「民間」に多くの人材を送り出してきた一橋大学では、政治を「官」ではなく「民」の視点で学んでいくため、国際関係論や行政学は法学部に置きながら、政治学を社会学・哲学・歴史学・社会政策学などとともに、「社会科学の総合学部」としての社会学部で教育することにしました。ですから一橋大学の政治学は、政治家や官僚を養成するための「国家学としての政治学」ではなく、主権者である市民に不可欠な総合的教養を身につけるための「市民社会の政治学」を志向し、政治現象を社会・歴史・文化の中で広く位置づける市民に開かれた学問をめざしています。

2. 履修モデル

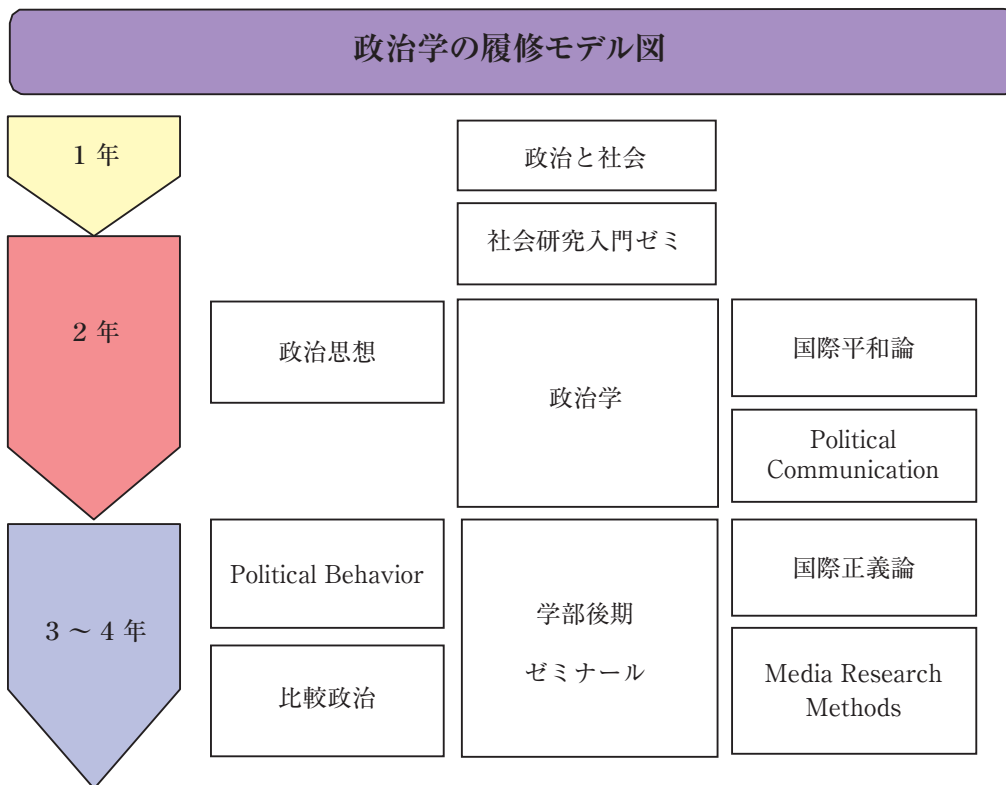
共通教育科目の「政治と社会」は、政治への導入にあたる科目です。あわせて外国語や他の社会科学も広く学んでください。グローバル化の進む現代では、政治現象は経済・社会・文化など、さまざまな領域の問題と深くかかわりあっています。どの分野からも、政治を掘り下げて考えるためのヒントが得られるでしょう。社会学部の導入科目である「社会科学概論Ⅰ・Ⅱ」「社会研究の世界」「社会研究入門ゼミナール」は、社会科学的なものの考え方、データの扱い方、輪読の仕方や議論の仕方を学ぼうと有益です。

2年生になると、学部基礎科目で「政治学」「政治思想」「Political Communication」「国際平和論」を履修することができます。「政治学」では、今日の政治を分析するための基礎的な理論と方法を学びます。政治学に関心のある学生は、まずこの授業を履修してください。「政治思想」では欧米で発展してきた政治思想の歴史と現代の理論を学びます。「Political Communication」では、民主主義に欠かせない政党・政治家と有権者の間の情報交換をどのように研究するかについて学びます。なお、担当教員は主に英語を用いますが、学生は日本語と英語のどちらを使っても構いません。「国際平和論」では、国際社会がいかに平和を築こうとしてきたのか、国際政治の基礎である覇権・理想・構造の諸理論を中心に学びます。これらの科目によって、政治学の基礎的なアプローチを身につけることができるでしょう。

3年生からは発展科目として、「Political Behavior」「比較政治」「国際正義論」「Media Research Methods」を履修することができます。「Political Behavior」では政治意識、メディアと政治、データ分析の手法、「比較政治」は現代欧米諸国の政治を、それぞれ専門的に考察します。「国際正義論」では、国際社会における平常時と非常事態における正義の分配をより詳しく平和構築の思想や軍事介入の論理などから多面的に学びます。「Media Research Methods」では、ソーシャルメディア上の政治コミュニケーションの具体的な分析方法について学びます。

さらに3年生から4年生にかけて、学習の軸となるのは、政治学担当教員の開講する「学部後期ゼミナール」です。政党と選挙、格差社会、グローバリゼーション、メディアと政治、紛争と平和など、政

治にかかわるさまざまな問題について担当教員や他の学生と議論をつみ重ね、最先端の学問を吸収しながら、学士論文を仕上げていくことになります。それぞれの選んだテーマに即して、社会学部の社会学・政策学・心理学・歴史学・地理学・移民研究などの関係する講義、法学部の国際関係論、経済学部の経済学・統計学など他学部の講義も広く学んでください。



●環境と社会

この領域では、社会地理学、地球科学、環境科学、フードスタディーズ、そして地域研究・開発研究を専門とする教員が連携し、人間による資源・環境の利用および管理という、学際的で文理融合的なテーマを探求します。ここでいう環境とは、食料生産の基盤となる生態系から都市の建造環境までを幅広く含んでおり、資源・環境をめぐる社会・知識・技術のあり方について、研究する地域の特殊性を重視し、かつ地球規模の視点をもちながら検討します。そのために、以下に示す本領域の科目を他領域のさまざまな科目と結びつけながら学んでいきます。3年・4年ゼミは教員ごとに行いますが、本領域のゼミ合同で卒業論文研究の関連発表の場を設け、指導教員以外からのコメントも得ながら研究を進めます。方法としては、現象をとらえる時間・空間スケールに気を配りつつ、社会調査、聞き取りや環境計測によってデータを手にし、分析・検討する野外科学・臨地研究を中心とします。

表：関連科目

	共通教育科目	学部導入科目	学部基礎科目	学部発展科目	ゼミナール
1年次	環境科学Ⅰ 環境科学Ⅱ	社会研究 入門ゼミナール			
2年次	地球科学 宇宙科学 サイエンス工房（多数開講；1・2年優先）	社会研究 入門ゼミナール	人文地理学総論 A・B 地域研究 A・B Conservation in Global Foodways		
3年次	自然地理学 地球環境システム など		同上	国際社会開発論 A・B 人文地理学特論 A・B 地球環境と地域社会 スポーツと開発	3年
4年次			同上	同上	4年

※「自然地理学」は社会の自然・環境的側面を検討する視点を養う科目であり、他の関連科目とともに、教職課程の教科に関する科目として地理の教員免許を取得したい人には必須である。「Conservation in Global Foodways」は GLP 科目であり、英語による。A・B 科目は、A・B を交互に隔年度で開講する。



写真1：ケニア中央部の農村。森林保護区から薪炭材を運び出す女性たち（上田撮影）



写真2：東マレーシア、サバ州のコタキナバル市場に揚がったキハダマグロ（赤嶺撮影）

【社会地理学】 本学の社会地理学では、人間—環境研究に加えて、地域研究を実践し、また国際開発・協力の「現象」を分析する開発研究を重視しています。発展途上国の政治・経済・社会、貧困と資源・環境、一次産品のバリューチェーン、国際開発・協力の制度や主体（ODA、企業のCSR、官民連携…）などが、主なテーマです。こうした研究は、先進国や新興国とのつながりに注目して行うこともできますし、その結果は途上国の場を通して先進国由来の「社会」理論に相対化を迫ることもなります。これに加えて、日本を含む各地の人文地理学、社会地理学的な研究も守備範囲です。個人・企業等の立地・分布、移動・近接性、場所イメージなど、人々の行為や認知の空間的側面の研究や、「空間」が「社会」とどのように相互作用して「社会問題」を生みだすのかを研究します。関連する授業は、人文地理学の基礎的な理論・方法を学ぶ「人文地理学総論」、アジア・アフリカ地域等の政治・経済・社会・環境などについて考える「地域研究」、地域開発の枠組みや制度を中心に論じる「国際社会開発論」、人文地理学の応用的な概念・分析手法の習得を目指す「人文地理学特論」です。ゼミでは、共通テーマを設定しての文献講読と、卒論に向けての個別発表を組み合わせで行います。

※スポーツと開発 たとえば、開発を接点として本領域をスポーツ社会学と結びつける研究が可能です。スポーツを通じて多様な開発課題や平和構築に取り組むNGOの組織研究や、大規模イベントが誘因する地域開発の諸影響に関する実地調査など、スポーツを切り口として「空間」と「社会」を考えます。

【地球科学】 高等学校まで「地学」として一括りにされた分野は、実はさまざまな学問の便宜上の複合体です。地震・火山・海洋・地質・雪氷・気象・天文・宇宙開発… それぞれに長い歴史があり、今も多数の研究者が先端領域を開拓しています。それらは日々の生活に密着していることも特徴的で、災害といった負の側面だけでなく、通信・測位・暦（カレンダー）・エネルギー・観光・政治・経済・教育などに関連していることは想像できるでしょう。3・4年次のゼミでは、教員の専門領域の宇宙測地学における各種システム開発・解析を行うことはもちろん、地球科学・宇宙科学を中心に各人の興味と独創性をもとにテーマを設定することができます。地球科学に関連する講義は、共通教育科目に分類されているものが大半ですが、そのなかにも研究テーマの材料は多数潜んでいるはずです。

【環境科学】 環境科学は複合的な学問分野であり、さまざまな方法論で環境を扱うことができます。例えば、環境社会学、環境心理学、環境経済学、環境工学などがあるように、文理を問わずさまざまな学問分野からのアプローチがあり、またそれらの分野を横断するような研究があります。扱う対象自体も、水、大気、廃棄物、生態系などさまざまあり、そのスケールも地球環境、地域環境、都市環境、住環境などグローバルなものからローカルなものにまでわたっており、それらが相互に関わりあっています。関連する講義は、共通教育科目として「環境科学Ⅰ・Ⅱ」「サイエンス工房」などがあります。3・4年次のゼミでは、英語文献を中心とした学生主体の輪講を行ったり、環境に関わるフィールド調査やフィールド実験を行いながら、卒業研究につなげていきます。

【フードスタディーズ】 『食』のグローバリゼーションと「グローバリゼーションと『食』」といったように、わたしたちの生活の基本である「食」にまつわる問題群（環境保全、食文化／食様式、スローフード、食の安全、フェアトレードなど）を、ローカル／グローバルに、重層的・多面的に分析します。いずれも問題設定の仕方によっては、単純に白黒や善悪を決められないテーマとなります。例えばマーガリンを事例に考えてみましょう。現在、マーガリンの主原料はインドネシアやマレーシアで生産され

るアブラヤシから採れるパーム油です。しかし、20世紀にはいったころから1950年代ぐらいまで、ヨーロッパでは鯨油がマーガリンの主原料でした。イギリスもノルウェーも、マーガリンを製造するために南極まで船団を派遣していた、と言っても過言ではありません。バターの代用品としてのマーガリン開発史はいうまでもなく、健康や美容、環境、倫理といった視点からも、わたしたちの食生活と「近代」が、密着したテーマであることがわかります。3・4年次のゼミでは、新書や選書など入手しやすい本で知識を蓄えたのち、英語文献にも挑戦します。また、食の現場におけるフィールドワークも適宜、おこないます。卒業研究は、広義の食環境の変容を扱うものであれば、自由に設定可能です。課題とする現場を観察するとともに、現場の人びとの声に耳を傾けつつ、フィールド感あふれる研究を志してください。



写真3：国立極地研究所におけるレーザ測距予備実験（右に写っているのは大坪）



写真4：スリランカ、ゴール州でのフィールド調査、井戸水のサンプリング（大瀧撮影）

大学院への招待

一橋大学大学院社会学研究科

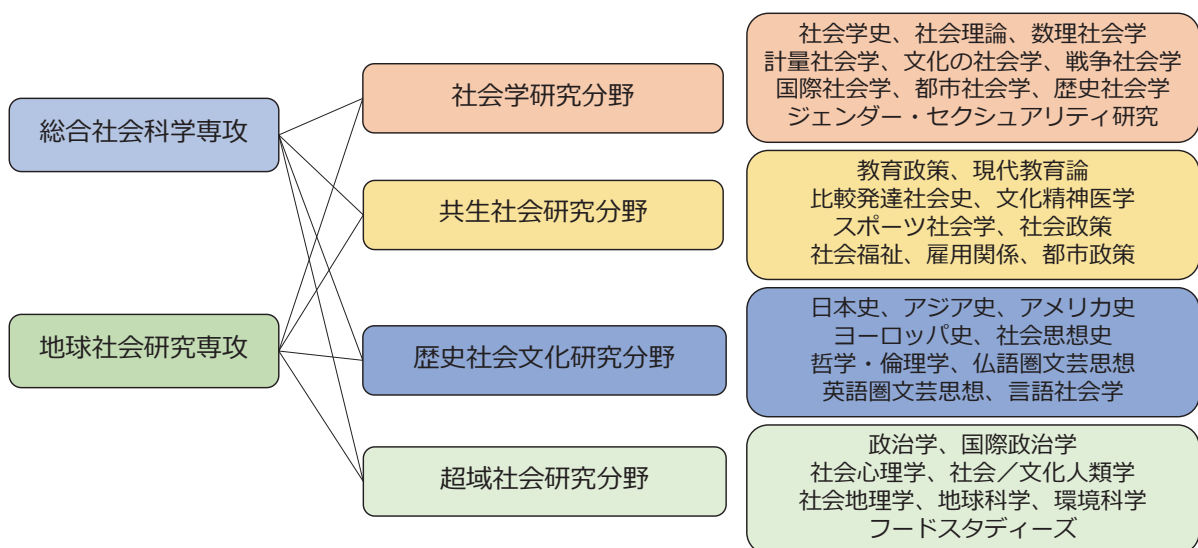
学部生の皆さんが学ぶ一橋大学のキャンパスには、学部とは別にさらなる学びの場があることを知っていますか。それが大学院です。学部で学んだことをさらに専門的に深めてみたい、また、社会の多様な領域で活躍していくため知的な基盤を固め実践力を徹底的に鍛えたい、さらに、研究者として知の先端と深淵を探究していきたい。こうした、さまざまな形で一步先に進みたい皆さんに、大学院は開かれています。

●大学院社会学研究科とは

国立大学で唯一の社会学部である本学部の「さらなる学びの場」として設計された大学院社会学研究科は1953年に設置され、社会科学・人文科学の幅広い諸分野を横断する教育研究の拠点としてその歴史を紡いできました。ちょうど今年で創立70周年をむかえました。

大学院社会学研究科には、総合社会科学専攻と地球社会研究専攻の二専攻があります。総合社会科学専攻は、2000年の組織改編で生まれた専攻で、ディシプリン（学問領域）に基づき個別研究分野の先端的な知と方法を学ぶことを追求しつつ、学際的・専門横断的な研究の推進を目指してきました。一方の地球社会研究専攻は、1997年に世界初のグローバル・スタディーズの大学院独立専攻として生まれた組織で、現代世界が直面するグローバルイシューに取り組む研究者や実践型職業人の養成を目指してきました。

2023年度からは、さらなら大学院教育の理想を求めて、両専攻を有機的に統合し、以下のような四つの研究分野に再編して、教育研究にあたることにしました。具体的には、国境を越えた人の移動や性現象を含みつつ社会学を軸として社会と人との関わりの解明を目標とする「社会学研究分野」、教育、スポーツ、文化精神医学、社会政策等人びとのウェルビーイングの達成を目標として政策・理論研究を行う「共生社会研究分野」、歴史学、社会思想史、哲学・倫理学、文芸思想研究、言語社会学からなり人文科学を探究する「歴史社会文化研究分野」、環境・社会・政治・人間行動を人文・社会・自然科学横断的に探究する「超域社会研究分野」です。



●大学院に入学するためには

社会学研究科では、修士課程の定員は一学年 90 名(総合社会科学専攻 70 名、地球社会研究専攻 20 名)、博士後期課程の定員が一学年 35 名(総合社会科学専攻 30 名、地球社会研究専攻 5 名)となっています。修士課程、博士後期課程ともに、一橋大学以外の大学の卒業生や留学生が多数学んでいます。なお、毎年 6 月と 11 月に大学院入試説明会をオンラインで実施し、個別相談会も行っていますので、ご活用ください。

また、社会学部生のみなさんには、履修ガイド 7 ページに詳細な説明があるように、「学部・大学院修士課程 5 年一貫プログラム」が用意されています。4 年間の学部教育と 1 年間の大学院教育(修士課程)を有機的に組みあわせ、最短で学部入学から 5 年間で学士号と修士号を取得できるプログラムです。より高度な教養を備えた社会人を目指す人、より短期間で博士号を取得してアカデミック・キャリアを切り拓きたい人は、トライしてみるといいでしょう。

修士課程：総合社会科学専攻と地球社会研究専攻は、ともに 9 月、2 月の 2 回、入学試験を実施します。このほか、社会人特別選考と特別選抜があります。

博士後期課程：修士課程からの進学者、また他大学・他研究科からの編入学者ともに、試験は 2 月末頃に実施されます。

●研究科の情報について

入学試験に関する情報は、社会学研究科のウェブサイト (<https://www.soc.hit-u.ac.jp/>) をご覧ください。大学院入試説明会や募集要項の入手方法・ダウンロード、過去の入学試験問題(直近三年分)、大学院入試実施状況、大学院入試 Q&A などをみることができます。またこのほかの情報についても研究科のウェブサイトから得ることができます。

Faculty of Social Sciences



HITOTSUBASHI UNIVERSITY